

COE

シンポジウム報告4

『図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』

2007年3月発行 A4判 275頁(英文併記)

編集・発行：神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議

内容：セッション 非文字資料をめぐる方法論的諸問題... デジタル人類学(リュアラン=マルク) 非文字資料はいかに認識されるか(的場昭弘) コメント(橘川俊忠)

セッション 図像のなかの暮らしと文化... 生活絵引編纂の世界的意義(福田アジオ) 『近世生活絵引』作成に向けての試み(田島佳也) 近世中国における芸術と都市文化(王正華) 韓国・朝鮮編の生活絵引編纂と図像資料(金貞我) コメント(モストー ジョシュア)・(トラーデメラニー)

セッション 犁の形態比較から東アジアの民族移動に迫る...  
セッション のねらい(河野通明) 中国の伝統犁とその技術移転(渡部武) 韓国の犁の形態と地域の特徴(金光彦) 日本の犁に見られる朝鮮系・中国系とその混血型(河野通明) コメント(尹紹亭)

セッション 景観・空間編成分析における資料としての写真の可能性... 景観分析における資料としての写真の可能性(藤永豪) 景観研究資料としての「渋沢フィルム」の今日的意義(浜田弘明) コメント(鄭美愛)・(奥野志偉) 総合討論



研究成果報告書

Report on the Result,  
Multilingual Version of Pictopedia of Everyday Life in Medieval Japan compiled from picture scrolls, vol 2

『マルチ言語版 絵巻物による日本常民生活絵引』  
第2巻(本文編)

2007年3月発行 A4判 219頁

編集：第1班「図像資料の体系化と情報発信」

発行：神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議

各研究所・研究科 問合せ

刊物や催し物については該当する各所にお問合せください。

045-481-5661(代)

日本常民文化研究所(内線4358) 歴史民俗資料学研究所(内線4024)  
中国語共同研究室(内線4525) COE支援事務局(内線3532)

日本常民文化研究所

Institute for the Study of Japanese Folk Culture

『民具マンスリー』40巻1号~3号

2007年4月~6月発行 各A5判 24頁

発行：神奈川大学日本常民文化研究所

内容：1号...イロリからホリゴタツへ(坪郷英彦) 宮崎県永牟田第2遺跡出土のカマド(嶋田史子)【民具短信】ノコギリヘツツイについて(金野啓史) 2号...東京内湾奥部のウナギ漁(尾上一明)【資料紹介】コックリさん関連資料(宇野田綾子)【書籍紹介】『石干見』(田和正孝)【書籍紹介】『神奈川県立歴史博物館総合研究報告 関東地域における民具の流通』(長田平) 3号...埼玉県東部低地の田植え衣装(宮本八恵子) 正月景品の社会史(大門哲)

歴史民俗資料学研究所

Graduate School of History and Folklore Studies

『歴史民俗資料学研究』第12号

2007年3月発行 A5判 367頁

発行：神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所

内容：【翻刻】『意地喜多那誌』(中町泰子)【書評】繁田信一『殴りあう貴族たち』(三村宜敬)【寄稿】歴史民俗資料学研究所への就任に寄せて(蔡文高)【研究ノート】博物館における「郷土」「地域」とその展示(内山大介) 蔵書家多賀三大夫常政についての覚書(佐藤哲彦) 日本にみられる風水思想について(高倉健一) 古流剣術の稽古における諸作法の事例(對馬陽一郎) 私は誰?(渡邊徳子)【論文】祖先儀礼をめぐる韓国の仏教と巫俗(金泰順) ノゾキの商売(坂井美香)『朝鮮軍陣図屏風』を読み解く(佐々木弘美) 演説のちから(高野宏康) モンゴル族のオボー信仰(ナランビリグ) 常総地方のオタチ行事(萩谷良太) 特許資料からみた昭和期における唐箕の改良(内藤大海)

外国語学研究所 中国言語文化専攻

The Course of Chinese Language and Culture,  
Graduate School of Foreign Languages

『神奈川大学大学院 言語と文化論集』第13号

2007年2月刊行 A5判 194頁

編集・発行：神奈川大学大学院外国語学研究所

内容：言語学の興味と方法(武内道子) 英語のイントネーション研究(澤村香代子) 言語形式のメタ心理的機能(松尾貴哲)『金瓶梅詞話』における「西門慶」の罵倒語の研究(渡辺博文) 王夫之の雑劇『龍舟會烈女報冤』をめぐる(黄障)『広東要明鶴同郷会』について(武吉彩華)「ローマのほうをより大事にしたからだ」(橋本侃)

非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials



非文字資料研究 No.16

発行日 第16号 2007年6月30日発行

編集・発行 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議  
The Kanagawa University 21st Century COE Program Center  
Systematization of Nonwritten Cultural Materials for the Study of Human Societies  
〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

Tel.045-481-5661 Fax.045-491-0659 URL <http://www.himoji.jp/>



## 特集

公開研究会  
「人びとの暮らしと生業 『日本近世生活絵引』  
作成への問題点をさぐる」を振り返って  
A Look Back at the Workshop on  
Obtaining Historical Information from Pictures

How to Use Pictorial Materials in Historical Studies 1  
『日本近世生活絵引』の作成をめざして…………… 3  
近世の北陸農村と松前地漁村  
の人びとの暮らしと生業  
Life and Work of Hokuriku and Hokkaido in Edo Era  
田島 佳也 TAJIMA Yoshiya

How to Use Pictorial Materials in Historical Studies 2  
生活絵引と菅江真澄…………… 17  
Pictorial Explanation and SUGAE Masumi  
菊池 勇夫 KIKUCHI Isao

How to Use Pictorial Materials in Historical Studies 3  
「人びとの暮らしと生業」に参加して…………… 18  
舟山 直治 FUNAYAMA Naoji

How to Use Pictorial Materials in Historical Studies 4  
鳥瞰の視線を考える…………… 20  
『生活絵引』作成における歴史学、  
民俗学と美術史学の合流点をめぐって  
池田 貴夫 IKEDA Takao

How to Use Pictorial Materials in Historical Studies 5  
アイヌ民俗図資料の見方…………… 22  
児島 恭子 KOJIMA Kyoko

How to Use Pictorial Materials in Historical Studies 6  
『農業図絵』にみる喫煙とジェンダー…………… 23  
長島 淳子 NAGASHIMA Atsuko

## 研究エッセイ ESSAY

幻の「満洲国」建国神廟を復原する…………… 24  
Restoration of a Manchurian Shrine  
津田 良樹 TSUDA Yoshiki

コラム Column…………… 26  
「虹」と「市」  
小野地 健 ONOCHI Takeru

コラム Column…………… 27  
キリスト教と現代日本人の生活  
曹 榮 CAO Rong

2007年度研究担当者紹介…………… 28

主な研究活動…………… 29

受贈資料一覧…………… 30

彙報…………… 31

Information…………… 32

## 神奈川大学工学部のふいご祭 The Blacksmith Festival

かつて鍛冶職人は旧暦11月8日に、ふいご祭という祭を行っていた。仕事場をきれいに掃除し、仕事道具であるふいご(送風器)に注縄を張り、神官を呼んで無事故と商売繁盛を祈ってもらい、その後親族や弟子を呼んでささやかな宴を持ち、隣近所のみかんと配ったという話は今でもあちこちで聞くことができる。この祭は鍛冶職人のみでなく、鉄の細工に関わる人たちの中で行われてきた祭事であり、石工もしばしば行っていた。石工は携帯可能な小さなふいごを持っており自分の工具はそれを使って自ら焼き入れや修理をしていたからである。さまざまに鉄に関わる人たちの祭といつてよい。

そして、その伝統は現在の大学においても引き継がれている。写真は2006年11月9日にとり行われた神奈川大学工学部におけるふいご祭。本学に機械工学科がおかれていることによる。ふいご祭の手前の写真は機械工学センターNCI作業実習室。ある意味で現代社会における「鍛冶場」のひとつの姿であろう。

当日は神奈川大学の近くの熊野神社の宮司さんをお願いし、工学部長、事務局代表、機械工作科主任、機械工作センター責任者などが玉串奉奠。神事のあとは五十名ほどの列席者で直会(なほらい)の宴をもつ。私が十余年前に調べた時点では、金工の彫刻がカリキュラムの中にある武蔵野美術大学や東京芸術大学でも行われていた。その諸経費は、正規の大学の予算の中に計上され、とり行われている例が多い。(撮影 本田 広幸、2006年11月)

(香月 洋一郎)

表紙写真説明



## 特集

# 公開研究会 「人びとの暮らしと生業 『日本近世生活絵引』 作成への問題点をさぐる」を振り返って

A Look Back at the Workshop on  
Obtaining Historical Information from Pictures

How to Use Pictorial Materials in Historical Studies 1

## 『日本近世生活絵引』の作成をめざして 近世の北陸農村と松前地漁村の人びとの暮らしと生業

Life and Work of Hokuriku and Hokkaido in Edo Era

田島 佳也 (神奈川大学日本常民文化研究所 教授/事業担当推進者) TAJIMA Yoshiya

### はじめに

2006年12月16日、COE1班では「人びとの暮らしと生業」と題して公開小研究会を開いた。これは日頃、『日本近世生活絵引』(以下、『絵引』と略)作成を試みてきたいわばその試作品を公開し、参加者に試作品の出来ばえや問題点などの意見を求めるために行ったものである。当日の発表者は本学COE構成員の菊池勇夫と田島である。菊池は、すでに18世紀末、菅江真澄が何がしかのヒントを得て景観や事物の「形」をあるがままに写し取った図絵を「かた」(図・画)と呼び、1788年(天明8)6月、仙台藩領前沢を出発して松前に向かい、盛岡藩領を北上したときの日記「委波氏廻夜麼」以来の図絵手法で、寛政3年の『蝦夷廻天布利』などでアイヌ絵引を作成しようとしていたことを『絵引』をする菅江真澄(菊池 2007<sup>1)</sup>)と題し、「鳥秀の瀧」(ウスの瀧)を例に明らかにした。

田島は2006年10月28、29日に神奈川大学で行われたCOE国際シンポジウムと同じく(田島 2006-2)『農業

図絵』(清水 2005<sup>2)</sup>)を題材に「城下金沢と近郊村に生活する人びと」に焦点を絞って『絵引』作成の一端を紹介した(田島 2006-1<sup>3)</sup>)。加えて、18世紀中ごろの平沢屏山作と目されている、函館市中央図書館所蔵『松前松山屏風 江指浜鯨魚之図』を材料に「江差浜における鯨魚と加工に勤む人びと」を『生活絵引』にした。ただ、この『江指浜鯨魚之図』の原図については不明で、事情は以前に『非文字資料研究』No.11(田島 2006-2<sup>3)</sup>)で述べておいたので、それを参照されたい。さらに、この『江指浜鯨魚之図』は江差浜に続く厚沢部川口の土場、柳崎の檜材集材場などを描いた『松前松山屏風 上ノ国材木流之図』(北海道編 1937<sup>4)</sup>; 江差町編 1982<sup>5)</sup>)と対になっているもので、後者にも柳崎などの海岸における鯨加工の様子も描かれており、そこからも『絵引』化を試み、披露した。本稿では、筆者が試みたその『絵引』化の一端を紹介することにしたい。

### 『絵巻物による日本常民生活絵引』と類似作品について

これまで字引に類する『絵巻物による日本常民生活絵引』(以下、『常民絵引』と略)といえ、学問には素人と明言していたといわれる澁澤敬三が、昭和15年(1940)以前から、字引とやや似かよった意味で「絵引は作れぬ

ものか」という発想から生まれた。そして、画伯や歴史学・民俗学などの専門家を集め、勉強会を開き、澁澤の没後も彼の遺志を引き継いで大変な苦勞を重ねて作られた(澁澤 1984<sup>6)</sup>)その『常民絵引』とは描かれた絵を

切り取ってきて、その描かれた部位に番号を付け、それに名称を付すものであるが、『常民絵引』の作成は前人未踏の試みであったといつてよいであろう。

しかし、その『常民絵引』と少し方法は異なるものの、菊池が明らかにした、先に掲げた菅江の図絵に関する考察をみると、すでに『常民絵引』的発想は早くからみられ、澁澤のまったく新しい、前人未踏の発想というべきものでなかったことがわかる。おそらく、丹念に調べれば菅江が試みたような事例がまだほかにもあるに違いない。ただ、菅江と澁澤の大きな違いは、菊池が的確に指摘しているように、菅江は同時代の人間を対象に、自分の作品を読む人々に説明をより一層解りやすく、かつ理解を促すために、自ら写生をし、写生物の個々に番号を付したのであるが、それに対して澁澤の『常民絵引』は、過去に描かれた図絵、とくに文献も数少ない、はるか中世に描かれた屏風絵や絵巻物を対象に、そこから切り取った図絵を読み取り、できうる限りの名称と説明を付けようとしたことにある。その意味では両者の試みに通底するものがあるものの、それぞれの作品は全く異なるといえよう。ただ、歴史学や民俗学、人類学などの多くの有能なブレインを抱え、自らもそれらの学問に造詣の深い澁澤が菅江などの作品からヒントを得た蓋然性が高いといえなくもない。そうではあっても、澁澤の立脚点にたてば、『常民絵引』全5巻、付録索引(角川出版社刊)はまったく斬新な作品と評価できようか。

この『常民絵引』と同じような作品は以後、長く作られることはなかった。それに類するものは近年、例えば『江戸商売図絵』(三谷 1986<sup>7)</sup>や『図録 農民生活史事典』(秋山他 1991)など数多く出版されたが、それらの多くは慶應3年(1867)に出版された喜多川守貞『守貞謾稿』(朝倉 1992<sup>8)</sup>に倣ったもので、『図絵』や『図録』といわれるものである。『絵引』といえるものではない。

### 地域で生活する人びとの暮らしと生業

澁澤の遺志を引き継いで、新たな『絵引』がこれまで作成されてこなかったのは、作成には多くの専門家が必要か、そうでなければ持続的な研究と作業(時間と費用)が伴うものであったことを如実に語るものにほかならないだろう。『絵引』作成の再チャレンジも条件は厳しい。とはいえ、解決の糸口を模索しつつ進める必要がある。地域で生活する「人びとの暮らしと生業」なる小研究会を設けたのも、その一環である。独断に陥りやすい『絵

引』という形で作成されたものはこれまで日本中世を対象とした『常民絵引』だけしかみあたらない。

そうしたなかで、『大江戸日本橋絵巻 熙代勝覧の世界』<sup>9)</sup>(以下、『熙代勝覧』と略)は『常民絵引』にかなり近い作品といえようか。この作品では日本橋通り界隈に集う商人や買い物客、通行人などに番号が付され、文献の博搜や専門家を集めた歴史的考証による名称や説明が加えられている。とくに、店の玄関に掛けられた暖簾の屋号からそれぞれの店名を調べ、商家の事績などの解説が付けられ、絵図をみながら読者は商家の歴史を学ぶこともできるなどの配慮がされている。そのみではなく、幕藩体制下の大都市、大江戸の役割も、都市の構造やそこに集う人々の姿を紹介するなかで理解できるように気配りされている。ただ、『熙代勝覧』は日本橋通りに集う人間に多くの関心が向けられたせい、建物の形態や各部の名称や説明が少なく、店に掛けられた暖簾などの種類に注意が払われていないなど、惜しい点も数々ある。しかし、近年にはない、かなり丁寧な精度の高い作品である。こうした特徴から『絵引』に近いと指摘したが、描かれた絵を切り取ってきて番号を付けるということ、この『熙代勝覧』では行っていない。その点では『絵引』とは似て非なるものであるが、むしろ『熙代勝覧』の分析に関わった人々にとってはこの作品を、いうところの『絵引』の範疇に含められるのをよしとしないかもしれない。『熙代勝覧』は『絵引』の作成手法とは出発点で異なるが、むしろ多くの専門家を集め、時間をかけて事物の考証を文献などの博搜を通じて行なった点で『常民絵引』と同じ方法を踏襲しており、しかも日本橋界隈の都市機能としての役割、大都市江戸の台所(経済)に焦点を据えた分析は『絵引』にはない新しい試みである。その意味では『絵引』を越える作品と評価できる。その分析方法、解説の取り組みは見習うべき点が多い。

引』作成の問題点を、英知を結集して探ることを意図した。当日はアイヌ風俗・歴史などの知見に詳しい児島恭子(早稲田大学講師)、舟山直治(北海道開拓記念館学芸員)、幕藩制下のジェンダーの視点から『農業図絵』を分析した長島淳子(早稲田大学講師)の各氏の参加を得た。以下は、その小研究会に提示した筆者の試論的『絵引』の一部である。

## 1. 城下金沢と近郊村に生活する人びと(18世紀初め)

### 1 金沢城から下城し、浅野川大橋界隈に達する武士団の行列

(『農業図絵』より)



容姿・動作

馬上の武士	かたぎぬ 肩衣	わきざし 大小の脇差刀	はかま 袴	ぞうり 草履	馬	おもがい 面懸	鼻括り革	くつわ 轡	手綱
胸懸	下鞍と鞍	羽織	裁着袴(カルサン)	とう 藁	立傘	かっぱ 合羽	かさ 合羽	はさ 挟み	ばこ 篋
床店の茶売り店		床店の箱屋店							

金沢城を下城し、浅野川大橋界隈に達した武士団の行列である。馬上の武士に従う供の武士達は身分によって行装も異なっている。また、統制が取れていない行列の様子から、屋敷に急ぎ帰る下級武士団の姿が窺われる。あるいは、近世初期、行列は整然としたものでなかったかも知れない。行列では右足、右腕を同時に出して歩くいわゆる「ナンバ歩き」が特徴的である。この歩き方はかつての日本人の歩行スタイルであると言われている。近年では日本人の体型にあった歩き方、また伝統的古武術に欠かせない歩行として注目されている。また、馬上の武士以外、裸足であることも注目される。

It is interesting to examine how to use pictorial materials in historical studies.

For example, we have some picture scrolls.

They are valuable materials for our studies.

Some of them were drawn in about the 18th century.

They are messages from people in the 18th century to us, but pictures are only pictures.

They are not clear enough for use in historical studies.

The difficult point is knowing how to extract real information and facts from them.

2 春、馬耕(犁)に勤しむ百姓の傍らで休憩、あるいは花見をしている家族

(『農業図絵』より)



娯楽・交際

桜の木? 胡坐をかく百姓 着物 グイ呑み 皿に盛られた惣菜 酒樽?  
 類杖の子供 着物 帯 酒を呑む類被りの百姓 一服する爺 煙管 桶  
 牡丹餅? 白褌掛けのグル鬻女性 股引 小桶 木椀 虫除けの松明

この図絵は実は「堅田一番返し」(一回目の乾田犁返し)の情景、すなわち馬犁に従事する百姓を描いた図絵の中の一部である。馬犁をしている傍ら、桜の木の下で酒や料理を食べている家族や連れの百姓の姿を描いたものである。当時、馬耕に勤しむ百姓の傍らで、こうしたことが許容の範囲内であったとしたら藩体制下の百姓世界、百姓の存在形態を再考する余地はまだかなりあるか。また、百姓世界の娯楽の在り方を考察する一助になりうるか。なお、一服している老人は神奈川大学日本常民文化研究所蔵本『耕稼春秋』では老婆として描かれているように見える。だが、女性の喫煙習慣は18世紀にはまだなく、19世紀になってからという(長島淳子『幕藩制社会のジェンダー構造』校倉書房 2006年)

3 年末の冷たい川での洗濯風景

(『農業図絵』より)



衣服・年中行事

てどりがわ 手取川で洗濯する女性 こそで 小袖 たすきが 褌掛け たらいあけ 股引 てつたが 盥桶 洗濯物  
 洗い上がりの洗濯物 赤子を肌負いする母親 頭巾風被り 下駄 まえだ 前垂れ  
 放髪の少女 筒袖の着物 裸足 尻端折り姿の百姓 手拭い被り ふんどし 褌  
 草履 踏み鋤 ①平鋤 ②天然腕木(又木) ③天干ししている着物

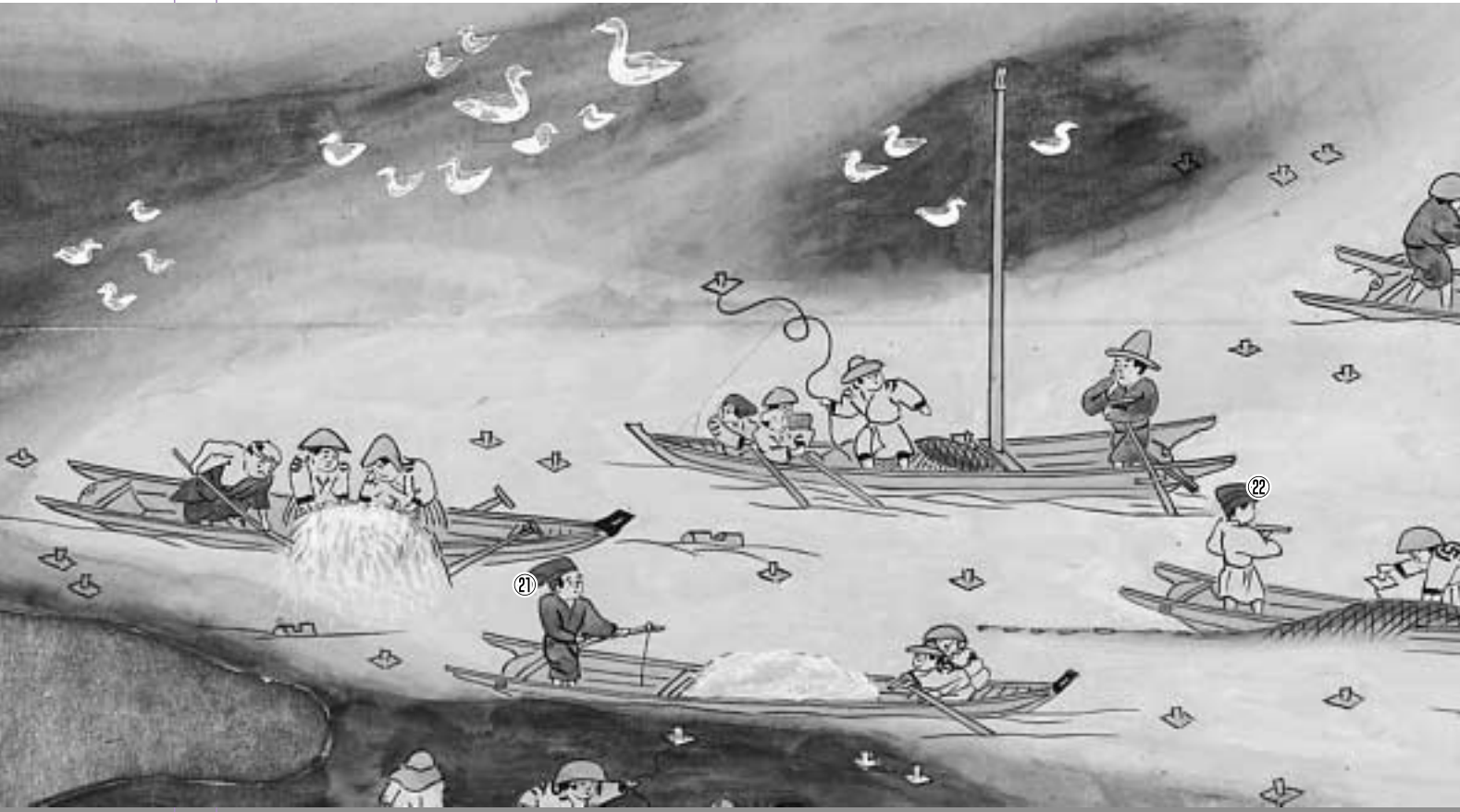
図絵をみると、背景には古来霊峰として加賀の人々に崇められてきた日本三名山の一つ、白山が描かれており(上図にはない)そこから流れ出た手取川の川岸で、新年を迎えるために年末に溜まっていた汚れ物を洗濯している。12月の川はかなり冷たく、川の中に入って洗濯する女性にとってはきつい労働であったに違いない。この洗濯の時には普通、洗濯水で足が濡れないように下駄を履く。川中に入る時には当然、下駄を川辺に脱ぐが、図絵の洗濯女性は川辺に脱いだ下駄もないことから最初から裸足であったと思われる。しかし、洗濯物を運んできた女性は下駄を履いている。洗濯女の後ろに鋤を担ぎ、鋤を持った農夫がいるが、この農夫も農具を洗いに来たのかも知れない。あるいは、洗濯場の足場の直しも行ったか。恐らく洗剤には米糠や米の研ぎ汁、灰汁が利用されたに違いない。ただ、この図絵には木台や石台が描かれていないことから、砧打ちによる洗濯は行われていなかったか。

## 2. 近世中後期、江差浜における鯨漁と加工に勤しむ人びと

以下、『江指浜鯨漁之図』(通称『江差屏風』とも)と『上ノ国材木流之図』(通称『松山屏風』とも)の一部に描かれている鯨漁に関する屏風絵で、生産から加工にいたる流れで鯨漁撈を追った。

### 1 鯨刺網漁の様子

(『江指浜鯨漁之図』より)



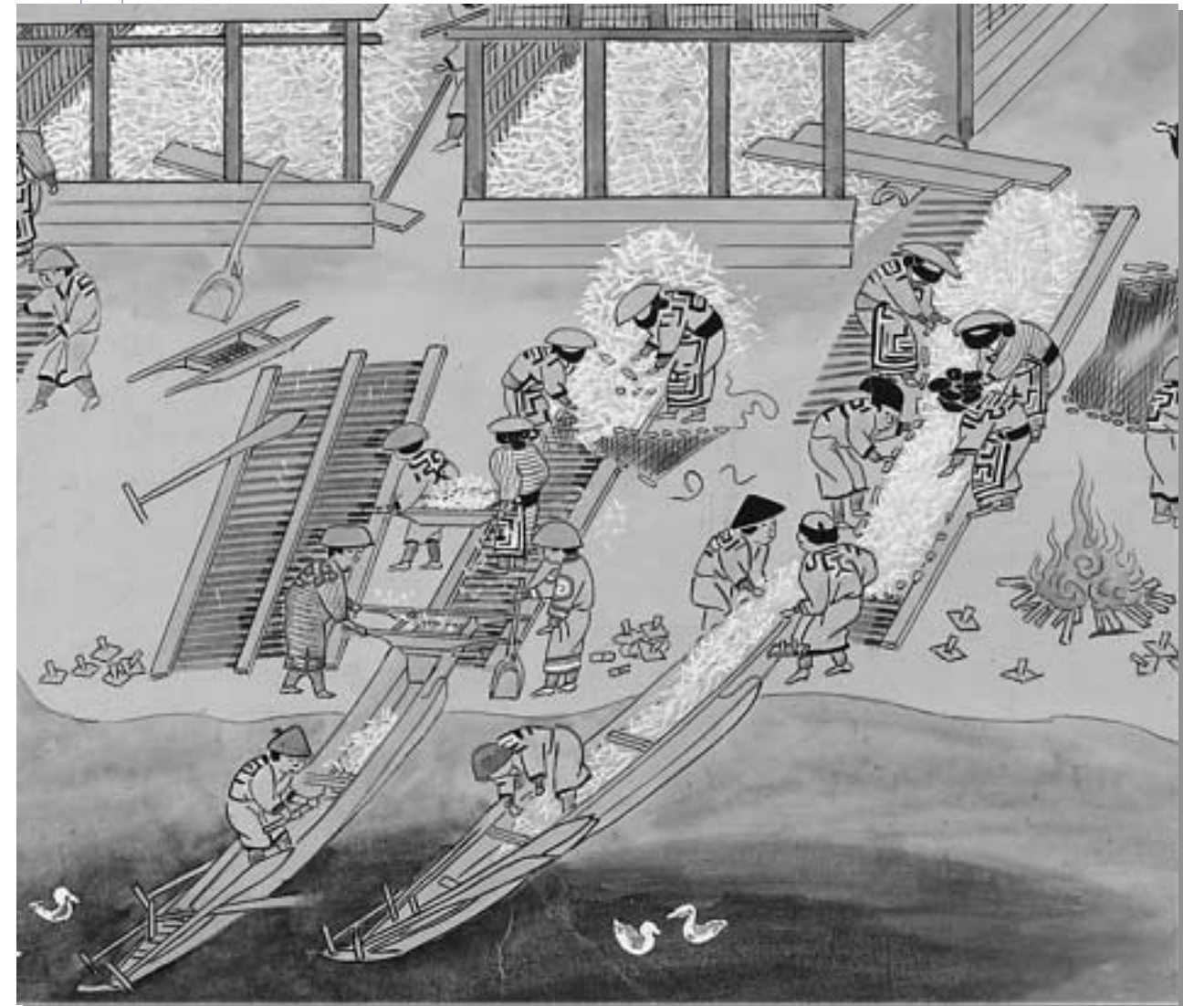
容姿・動作・労働

鷗(ゴメ) 鯨の群来で白濁した海 三半舟(鯨舟) 水押(舳) 籠  
 帆柱 早權 早權の權引き繩(輪繩) 櫓 櫓繩 藁製刺網  
 浮標(タズ、アルケダンプ、ボンデン) ヤリ網 家印木 ヤッサイ鉤 鯨(鯨、鮠、青魚、春告魚)  
 捻り鉢巻き 編み笠 防寒頭巾 藁帽子 ①シコロ付角頭巾 ②桂包?

春告魚(鯨)の漁期は2~5月の3か月である。群来は夜から朝にかけてあり、漁民たちはそれを群れたゴメの騒々しい鳴き声と雄鯨の海岸海藻(ゴモ)への射撃による海の白濁化で知った。江戸時代、江差前浜は自由に操業ができる入会の海であったため、近隣諸村からも鯨舟が我れ先に出漁して盛況を極めた。漁民たちは他人の網と区別するために浮子と自分の家印木(桐製)を付けた刺網を思い思いに鯨舟から海中に下ろし、網にまるで昆虫のケラのように突き刺さった鯨網をヤッサイ鉤で引っ掛けて舟上に引き揚げ、櫓と櫓を操って浜に運んだ。描かれた図絵が正確に写生されたものかどうかの確認は甚々難しいが、正確であったとするならば、鯨舟には舳があるので小型の保津舟ではなく、遠距離でも運べる三半舟(帆柱を付けられる)であったといえる。また、操業や操船漁民たちの中には刺子(ドンザ)を着ている者、普通の着物を着ている者が見受けられ、漁撈には思い思いの格好で漁に参加していたことを知りうる。ただ、漁期は厳寒の冬である。諸肌脱ぎや裸足、軽装に過ぎる漁民がいるのは、疑問に感じられる。

### 2 江差浜に運ばれた鯨を網から外す

(『江指浜鯨漁之図』より)



容姿・動作・労働

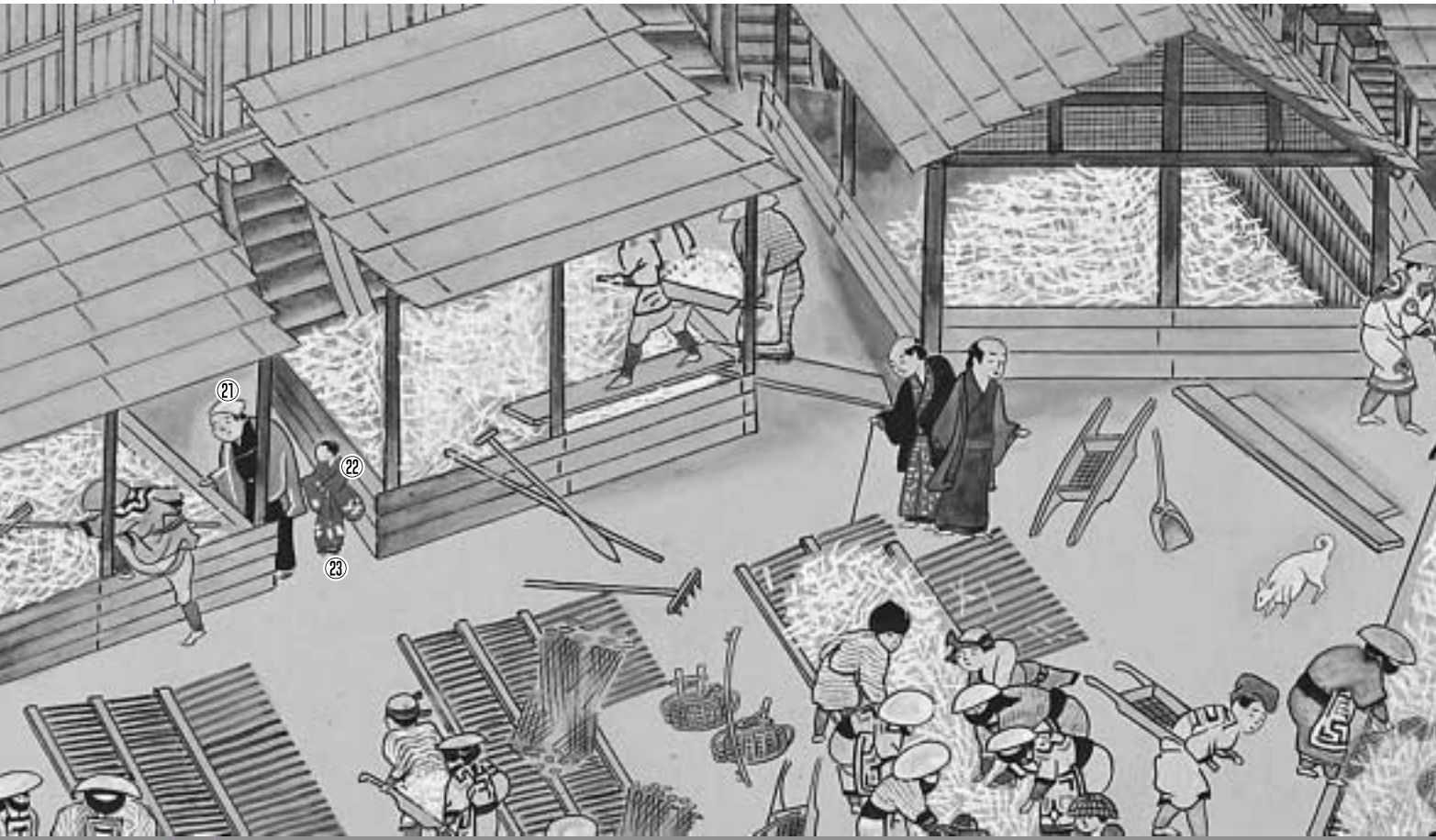
磯舟 早權 厚刺(アットウシ) 菅笠 黒塗り笠 筒袖短着の刺子(ドンザ)  
 黒頭巾 防寒黒覆面 肩上げ紋 蓑掛り鯨 簀台 刺網 浮子(アバ)  
 ナツ石(沈子・イワ・シズミ) 鯨の網外し 手替(たなぎ替) 木製掬い鎌 焼き火  
 浮標(タズ・アルケダンプ・ボンデン) 脚絆(はばき)

刺網に養(ケラ)状にぎっしり突き刺さったままの鯨をそのまま浜に運び、浜に拵えた簀の上に引き上げ、待ち構えた漁夫や漁婦が網から鯨を外した。アットウシやドンザを着た漁夫や漁婦が焚火の横でかすかな暖を取りながら、網からの鯨外しに精を出している。漁婦のなかには寒さを凌ぐために防寒用の黒い覆面で顔を覆っている者もいた。しかし、足もとに目を向けてみると、真冬にも開らず、足に脚絆をしている者がいるものの、皆、裸足である。簀のそばには焼き火があるが、暖をとっているほど暇ではない様子である。

網から外された鯨は随時、木製の掬い鎌で手替(たなぎ替)に入れられ、二人して鯨の一時的貯蔵庫である廊下に運ばれた。鯨舟から浜辺の簀へ、簀上の鯨外しが終わったら、随時漁舟や漁具、簀、運搬具などの点検と水洗い(海水による)、片づけが並行して行われた。

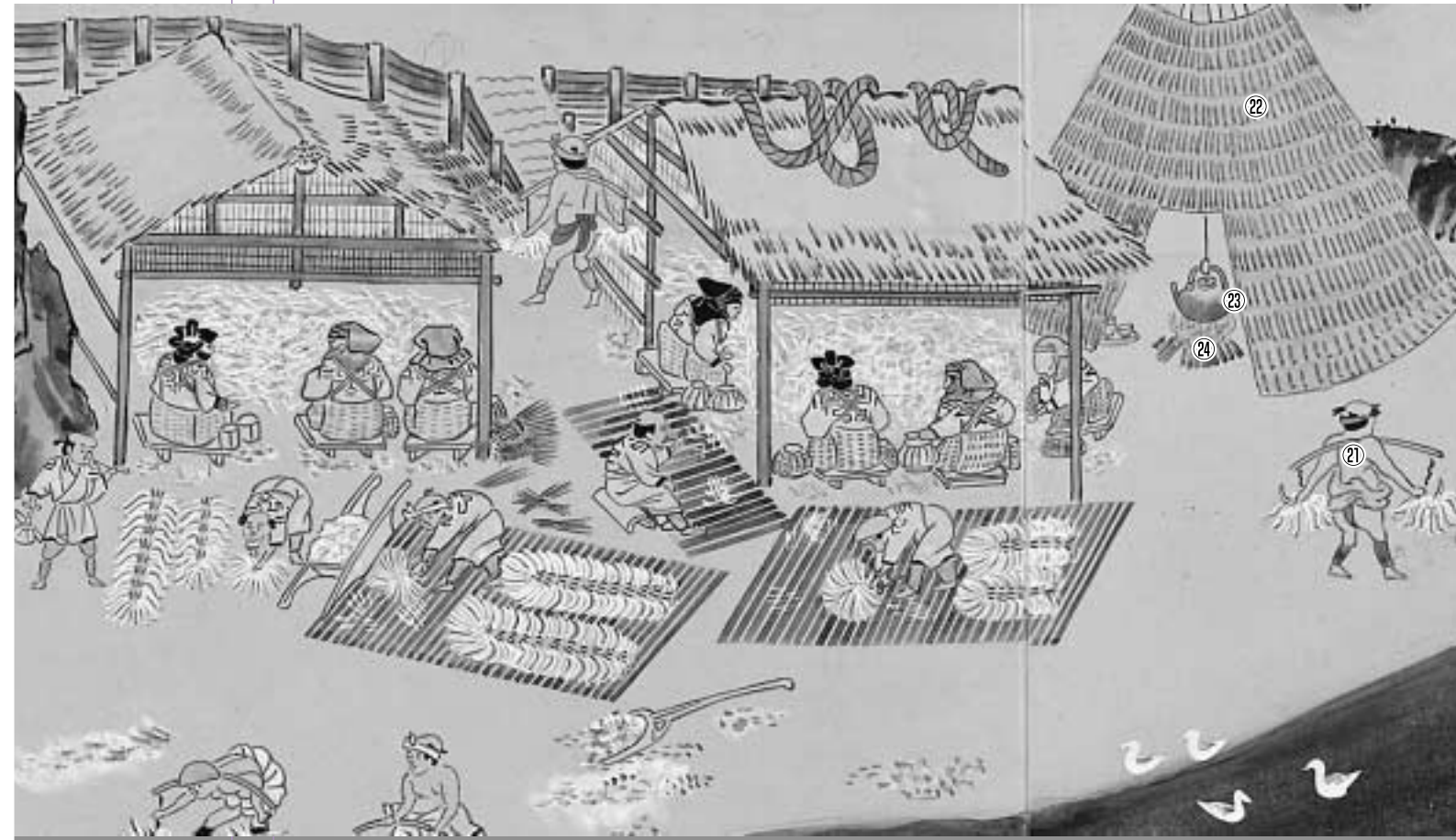
3 廊下への鯨の運搬と貯蔵

(『江指浜鯨漁之図』より)



4 鯨漬しと鯨干場への運搬

(『上ノ国材木流之図』より)



容姿・動作・労働

長板横葺き屋根の廊下 柱 板壁 踏み板 蓑掛り鯨 コマザライ  
 手舂(たなぎ舂) 木製掬い鎌 櫂あうご(天秤棒) 簀 刺網びく 魚籠 白犬  
 江差商人か、漁場の親方・支配人? 羽織 木杖 帯 脚絆(はばき) 着物  
 ①白頭巾 ②赤振袖姿の少女 ③下駄

容姿・動作・労働

なつぽ 魚坪 藁葺き屋根 棟押さえの太縄 鯨 風呂敷の頬被り ムマ(腰当・腰掛・馬板)  
 手籠 シロシタかますよう むしろ ひざい(吹様の蓆の膝入れ) 黒頭巾 菅竹(サシ) 菅縄緒(繫ぎづら)すげござ 菅莫産  
 鯨の尻繫ぎ作業 繫ぎ連の鯨(10~20連) 手舂(たなぎ舂) 口腔を刺した尻繫ぎ鯨  
 洗い鉤付き天秤棒 木皮綱 褌 脚絆 ①裸姿の漁夫 ②蓆囲いの掘立て丸小屋 ③薬缶 ④薪火

江差浜の海浜幅は狭く、浜辺近くまで江差商人の桧板・横板化粧をした土蔵が迫っていた。その土蔵手前の浜には、網から外した鯨を加工のための魚坪に運ぶ前に4、5日貯蔵しておく、貯蔵庫(廊下)が造られた。廊下は鯨の漁獲高次第で、外壁の板が高められ、より多くの鯨が貯えられるように簡易的に造られていた。廊下に鯨が貯まると、漁夫はコマザライを使って、より多くの鯨が入るように均し、あるは魚坪に運ぶために寄せた。鯨を廊下に一時的に貯蔵するのは数の子が固くなり、腹が柔らかくなって鯨漬しがしやすくなるためである。

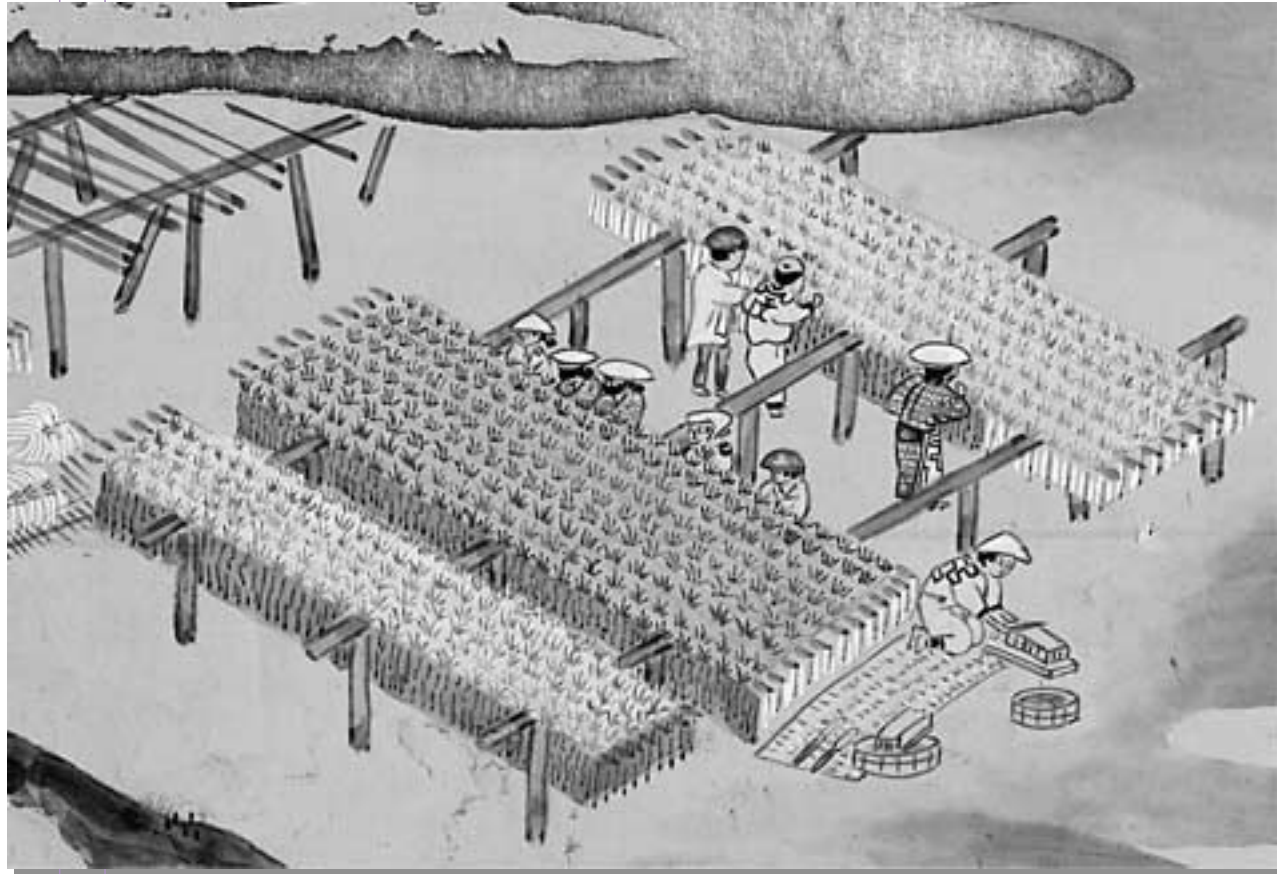
ところで、漁夫たちが鯨外し、鯨の運搬と、戦場のように忙しい浜に、鯨場の親方と支配人、あるいは鯨漁況の視察にやってきた羽織姿の江差商人と支配人であろうか、仕事ぶりや鯨の良悪を見にきた様子が描かれている。また、廊下の傍には振袖姿の少女を連れた町人と思しき見物人も描かれている。鯨漁が江差町全体の経済と生活に密着していた漁業であったことを窺わせる。白犬が浜をうろついているのも生活感が感じられる。

漁婦が廊下から魚坪に運ばれてきた鯨を、ムマに座り、足をシロシタ(吹様の蓆の膝入れ)に入れて鯨漬し(鯨の数の子や白子、鰓、内臓などを身から選り分ける作業)をしている様子。寒さと魚の臭気、魚脂粉に見舞われての作業であった。鯨漬しは手首(指5本が別々になっている指サック、指袋)を使って選り分けられ、鯨の口腔に菅竹を刺し、菅縄緒で連結し、干場に運んだ。連結鯨は大体10~20連、1連は21匹であった。端数は木架(魚架。早切に吊した鯨を干す)などで腐って、あるいは重みで落下し、商品にならないものがあるための補填対策といわれる。

魚坪の近くに漁期だけの荒縄結束、蓆囲いの掘立柱の丸小屋がある。浜小屋ともいう。上から吊るされた薬缶が火に架けられている。漁夫漁婦たちの休憩場所である。19世紀に入ると、鯨場の仕込が始まる4月頃から本州諸港へ向う海運の絶える9月頃まで、丸小屋は江差町会所から許可を得た諸商人が、出稼ぎ漁夫や旅人、船方相手に飲食や雑貨、古手などを商う店や遊戯・遊戯店となった。幕末には下級花街店にもなった。図絵で注目されるのはやはり半裸の漁夫たちの作業姿である。厳冬の鯨漁季から見て、疑問に思われる光景である。

5 鯨干場での身欠鯨の木架干し

(『上ノ国材木流之図』より)



容姿・動作・労働

鯨干(乾)場 桁 竿又(マツカ、亦木) 早切 白菅笠  
 菅笠 手拭い頬被り 防寒黒覆面 厚刺(アットウシ) 刺子(ドンザ)  
 半纏 身欠鯨 繋ぎ連の鯨(10~20連) 菅縄緒(繋ぎづら)  
 菅莫産 砥石 砥石台 水桶 鯖差(身欠製造小刀)

鯨干場での木架は太い竿又と桁からなる。その木架の上に角材(早切)を載せ、天秤棒の先の洗い鉤に吊され魚坪から運ばれた尻繋ぎした身欠鯨を男と女が共同作業で早切に懸けている。木架が丈夫でないと、また早切に平均して荷重が掛からないと、身欠鯨の重さで木架が横倒しになり(これを留萌地方では「木架餅(なやもち)」という)、大損害を被ることになる。また、早切と早切の間は気候や風の通り具合などで調整して身欠鯨を干した。その調整により、乾燥時間が異なったからである。したがって、木架には適当に身欠鯨を架ければ良いというものではなかった。

女性であろう、木架の手前では菅莫産を敷き、鯖差を砥石で研いでいる。鯖差は身欠鯨を作るのに使うが、ここでは恐らく木架から落ちた身欠鯨を繋ぎ直して吊すために使用するのであろうか。大抵は木架の間の通路にも、簾や菅莫産を敷いて魚肥となる笹目(鰓)や白子、胴鯨(端鯨。頭部、背骨、腹部、尾の接続したもの)などを干したが、この図絵にはそれが描かれていない。さらに、鯨粕の粕焚き釜場も描かれていない。鯨粕の登場は19世紀の初めまで待たなければならない。

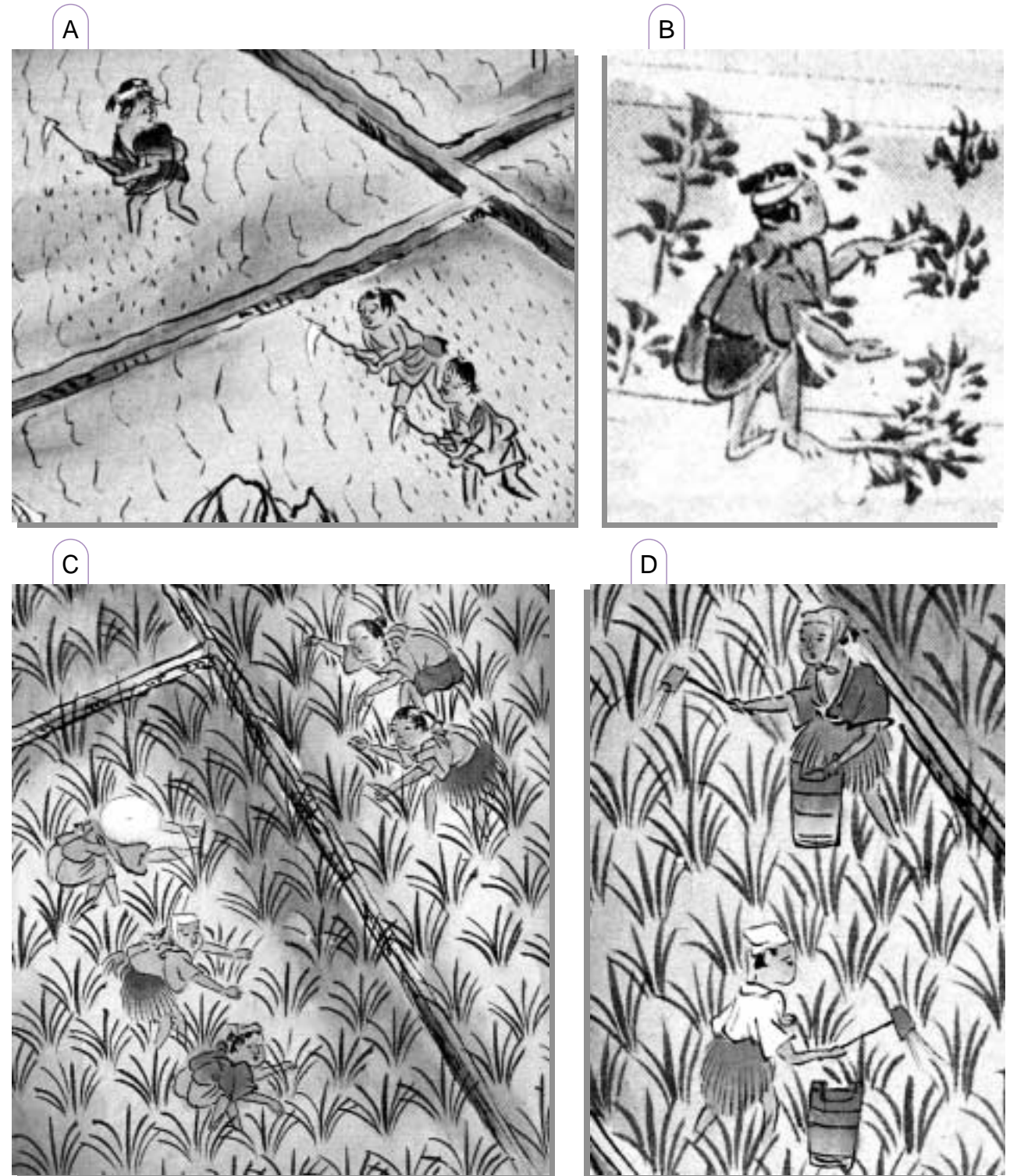
以上、清水隆久校註・執筆の『農業図絵』と、函館市中央図書館所蔵の『江指浜鯨漁之図』、『上ノ国材木流之図』の一部を紹介・使用して『絵図』を作成し、解説を

試みた。

次に、『農業図絵』に描かれた百姓の姿からいくつかの疑問点を提示してみたい。

『絵引』作成上での疑問点 『農業図絵』を例に

下記の(A)-(D)は『農業図絵』から『絵引』を作成しようとした時に、判断に迷った図絵である。



(A)-(D)の農作業中の人物は農婦か農夫か、みる人によって判断が分かれると思われる。江戸時代の農婦は、

一般的に股引か、前垂れをつけて農作業をしたといわれる。また、腰蓑は江戸時代の農夫のシンボライズともい

われてきた。こうしたことを踏まえて、いくつかの疑問点を提示してみたい。

まず、(A)は湿田の荒起こし後、土塊(亀という)を鎌で小割している図絵である。の人物は顔立ちからすると、女性のように見受けられるが、頭は丁髷に鉢巻き姿のようにも見受けられる。そのうえ裾上げをしながら鍬をもって耕作している。清水隆久氏も長島淳子氏もこの人物を農婦とみているが、前掛けをつけておらず、股引も履いていない。

(B)のの人物は麻苧を植えているところである。頭は丁髷に鉢巻き姿のようにも見受けられるが、襷掛けの

半股引姿であり、これは女性であろう。(C)は表田の草取りの様子で、草むしりをした草を土中にかき回している図である。白手拭いで頬被りし、襷掛けしている人物は女性であろうか。清水氏は女性としているが、腰蓑を纏っている。(D)は表田の追肥の情景である。頬被りして腰蓑を付けた農夫が肥桶をもって施肥をし、その近くで姉さん被りの農婦が肥桶を地面に置いて柄杓で下肥を撒布している。この農婦も腰蓑を着けている。農婦は前垂れや股引を着けずに農作業に従事することや、腰蓑を着けて農作業をするようなことが一般的であったのであろうか。

Pictures are nonwritten materials. Our work is dependent on written language. We are trying to bring nonwritten information to the written world.

Our trial may be a contradiction. Because even until modern times, what can't be expressed in words is often expressed in pictures.

If using words was the most effective means to have expressed an idea, they would have used them and left us written messages.

次をみよう。(E)~(G)も農婦の図である。(E)は加賀笠の原料、萱を刈り結束している図、(F)は粟穂刈り、(G)は老婆が落ち穂拾いをしている図である。(E)の赤手拭の頬被りに赤襷掛けの女性は明らかにほかの女性たちとは出で立ちが異なる。萱刈りをしている(F)は若者ともみえるが、女性と推測され、前垂れも、股引も着けていない。着物の胸元をはだけさせながら孫と一緒に落ち穂拾いをしている(G)の老婆の場合は、前垂れや股引を着用していない。農作業以外、それが一般的だったのであろうが、農作業ではこうした前垂れや股引を女性が着用しないことが、どれほど普通のことであったのだろうか。

こうした疑問の提示に対して、小研究会では福田アジオ氏が一般的に東日本では女性は股引を、西日本では腰巻を着用するといわれているが、必ずしもそうではない

と指摘された。着用したり、しなかったりということか。

『農業図絵』の舞台、金沢近郊村が東日本、西日本のどちらの範疇に含まれるのか、はっきりしないが、女性の前垂れや股引、腰蓑の使用、不使用が混用されていることから考えて、中間地帯の特徴を表わしているとみるべきか、そうではないのか、また、農夫のシンボライズといわれてきた腰蓑の使用が女性にも広がっているのが事実とすると、腰蓑は近世中期に農夫のシンボライズが形骸化し、その役割を終えつつあったと考えてよいのかどうか。こうした疑問点は一般的にいわれてきた近世期の女性の慣習、とくに既婚者の眉剃り、鉄漿、喫煙、町方女性の着物と着付け方などについてもある。『絵引』の作成には、検証を含めて考証を重ねなければならぬ留意点であろう。

E



F



G



### おわりに

小研究会では以上の『絵引』を提示しつつ、参加者を変えて活発な議論が行われた。『絵引』とは個々の切り抜いた図絵に一点一点、名称を付けていって完成させるが、果たして付けた名称が描かれた図絵の当時、そういう名称で呼ばれていたのかどうか。それよりも何よりも、屏風絵や図絵が果たして何処まで真実を描いているのか、また、その真実性をどのようにして検証できるのか、図絵の読み解きは何を根拠に読み解いていけばよいのか、その方法は、など数々の本源的な問題点が話し合われた。

しかし、問題解決のその有効な手立てもなく、『絵引』作成の時間的制約の中では現時点での力量を前提に『絵引』の作品化をせざるをえず、そのより一層の完成度の達成、間違いの訂正などは後世に委ねざるを得ないという結論に至った。つまり、何よりも試作段階であっても、批判を恐れずにそれを積極的に提示することに意義を見出すしかない。

そうしたこともあって、『絵引』作成の補強の意味を兼ね、またより一層の正確さを期して、年末には『農業図

絵』が描かれた御供田村などの地域を実地に踏査し、『農業図絵』の描写の真実性の確認を、現在も残る寺社などの聞き取りや資料館の文献などに当たることから試みた。その結果、現在も残る風景や寺社などにかなりの程度の真実性を確認できた。

『江指浜鯨漁之図』については、鷗島のようにまだ往時の姿をとどめているところもあるが、概して、江差町は江差浜海岸の埋め立てと産業道路の建設によって海岸線がかなり後退するなど、開発によって町の情景や景観がかなり変化してしまっており、往時の面影を発見することが難しい。しかし、江差でも往時の面影を残して存在する旧跡がある。それをヒントにイメージを作り上げていける。本稿に示した『絵引』は不完全さの残る、こうした手続きの上に試作したものであり、小研究会で寄せられた意見や誤りの指摘によって多少の手直しをして作成したものである。

最後に、『江指浜鯨漁之図』については、病気で若くして急逝された北海道開拓記念館の林健太郎氏から、学術



研究に資するという事で資料を提供され、多くのご指示もいただいた。感謝とともにご冥福をお祈り申し上げます。また、『絵引』作成の協力者である跡見学園女子大学の泉雅博氏をはじめ、同大学4年生の平岡諒子氏には史料調査・考証・分析などに多大なご助力をいただいた。小研究会には早稲田大学の児島恭子と長島淳子の両氏、

北海道開拓記念館の舟山直治氏にコメンテーターとして、他には同記念館の池田貴夫氏をはじめ、歴史民俗資料学研究科の院生諸氏にもご参加いただき、貴重な意見を賜った。とりわけ池田氏からは玉稿をお寄せいただいた。記して感謝申し上げます。

注

- (1) 菊池勇夫 2007 神奈川大学COE年報『人類文化研究のための非文字資料の体系化』第4号 p107-114。
- (2) 清水隆久校註・執筆 2005『農業図絵』(『日本農書全集』26巻5刷) 東京：農山漁村文化協会。
- (3) 田島佳也 2006-1「屏風絵を読むにあたって」『非文字資料研究』No.11：p10-13。  
2006-2「『日本近世生活絵引』作成に向けての試み」『神奈川大学21世紀COEプログラム 第2回国際シンポジウム 図像・民具・景観 非文字資料から人類文化を読み解く』p74-97。
- (4) 北海道編 1937『新撰北海道史』第2巻通説1 p160-161、181。
- (5) 江差町編 1982『江差町史』第5巻通説1 表紙扉2枚目。これには「江差屏風とヒノキ山屏風」の題名が付けられている。
- (6) 澁澤敬三・神奈川大学日本常民文化研究所編 1984『新版 絵巻物による日本常民生活絵引』第1巻 viii-x 平凡社
- (7) 三谷一馬 1986『江戸商売図絵』東京：立風書房。ほかに風俗絵引シリーズとして、『江戸職人図聚』『江戸物売図聚』『定本江戸商売図絵』などを出版。ほかに、秋山高志ほか編 1991『図録 農民生活史事典』東京：柏書房。『図録 都市生活史事典』『図録 山漁村生活史事典』などもある。笹間良彦 1995『復元 江戸生活図鑑』東京：柏書房。高橋幹夫 1994『江戸萬物辞典』東京：芙蓉書房。高橋幹夫 1995『江戸商売絵引』東京：芙蓉書房など。
- (8) 喜多川守貞著 朝倉治彦・柏川修一校訂編集 1994『守貞謄稿』第1-5巻 東京：東京堂
- (9) 浅野秀剛・吉田伸之編 2003『大江戸日本橋絵巻 熙代勝覧の世界』東京：講談社

参考文献

- 北海道教育委員会 1970『日本海沿岸ニシシ漁撈民俗資料調査報告書』
- 高橋明雄 1999『鯨』北海道：北海道新聞社
- 宮下正司 1991『江差風土記』自費出版
- 北水協会 1977『北海道漁業志稿』東京：国書刊行会

公開研究会概要

1班「『近世・近代生活絵引』編纂」公開研究会  
 「人びとの暮らしと生業 『日本近世生活絵引』作成への問題点をさぐる」  
 日時：2006年12月16日(土) 13:30～17:00  
 会場：神奈川大学横浜キャンパス21号館405室  
 報告： 菊池 勇夫「菅江真澄がみたコタンの景観」  
 ＊コメンテーター：児島 恭子(早稲田大学講師)/舟山 直治(北海道開拓記念館学芸員)  
 田島 佳也「土屋又三郎『農業図絵』に描かれた城下金沢と近郊村に生活する人びと」  
 「江差浜における鯨漁と加工に勤しむ人びと 『江指浜鯨漁之図』から」  
 ＊コメンテーター：長島 淳子(早稲田大学講師)/舟山 直治  
 討論 『日本近世生活絵引』作成の諸問題について



How to Use Pictorial Materials in Historical Studies 2

生活絵引と菅江真澄

Pictorial Explanation and SUGAE Masumi

菊池 勇夫 (宮城学院女子大学学芸学部 教授/共同研究員) KIKUCHI Isao

三河の人菅江真澄は近世後期、東北・北海道を旅し、土地の人々の暮らしや習俗を記録した。寛政期には蝦夷地(太田山・有珠山)にまで足を踏み入れ、アイヌの人々の生活文化に直に触れている。柳田國男が真澄を「親切なる平民生活の観察者」(『菅江真澄遊覧記を読む』)と評したのは正鵠を得ている。

真澄は歌人であったから、文と歌の組み合わせは当然としても、それに加えて、数多くの絵を残してくれた人であった。文・歌・絵が一体となっているのが真澄の遊覧記(日記)の特色となっている。絵にはしかも、描いた事物の一つひとつに甲乙丙...などと番号が付けられ、余白部分にその名称を記すといった、「絵引」と呼んでもよいような手法をいち早く取り入れていた(拙稿「『絵引』をする菅江真澄」『年報人類文化研究のための非文字資料の体系化』4、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年)

本COEプログラムの第1班は澁澤敬三が提唱した『絵巻物による日本常民生活絵引』になって、近世・近代の生活絵引の作成を目的の一つにあげている。そのうち、近世の北海道地域(松前・蝦夷地)のアイヌおよび和人の生活文化を分担することになっている。絵引とは、描かれた一つひとつの事物に適切な名前を与えていく作業である。単純化していえばそうなのであるが、当時その土地で何と呼ばれていたのか、さらにアイヌ文化の場合にはアイヌ語の呼称・表記という問題もあって、名づけ自体が実は一番難しいことなのかもしれない。

描かれた事物についての周辺・関連情報を文字・非文字資料にかかわらず、隈なく調べ集めていくしか方途はない。むろん、名づけすればよいというものではなく、その用途や意味、背景、関係性などに十分に読き及んで、すでに失われた過去の生活文化の理解に誘うものであらねばならない。単なる物品のカタログではないからである。絵引の作業は同時に絵解の作業でもあり、そこにいろいろの発見があって、新たな研究にもつながっていく。

さいわい、真澄の絵は日記の挿絵であれば、いつでも描かれたのが本文の記述によってほぼわかる。加え

て、前述のように真澄自身が絵引的な手法を用いていた。プロの絵師ではない素人的な絵なので、「美術」というジャンルに入れるのには抵抗の向きがあるかもしれないが、事物をありのまま記録しようとする態度は絵引の素材とするうえでは好都合である。現在、真澄の絵はモノクロ中心であるが網羅的に『菅江真澄全集』(未来社)に収録され、また主要な絵はカラーで『菅江真澄民俗図絵』(岩崎美術社)で確認することができる。インターネットで秋田県立図書館のウェブサイトにアクセスすれば当館所蔵写本のカラー画像が容易に見られる。絵の共有化という点でありがたい。

近世北日本地域の社会史、あるいは生活文化史に興味を持って、これまでも真澄の記述(文)からヒントを得てさまざま調べてみるということをしてきた。絵引を意識するようになってからは、真澄の絵からイメージをふくらませ、絵から文へ、という思考の回路が多少身についてきたように思う。

個人的体験でいうと、たとえば、真澄の絵のなかに、北海道の渡島半島西海岸の浜辺を描いた図があり、そこには本州では目慣れない円錐形の葦で周囲を囲った小屋が描かれているのが気になった。真澄はこれを「丸屋形」「円舎」(マロヤカタ・マルヤカタ・マルゴヤ)と表現している。調べていくと、近世の北海道で、アイヌの人々が生業や交易で移動するさいに持ち運ぶ簡便な住まいの用具であり、それが鯨漁や昆布刈りに出ていく和人漁民たちにも使われていたことがわかった。丸小屋の形状はアメリカの先住民などにも見られ、人類史的な興味もわく。別に新しい発見でも何でもないが、もっぱら文から考えてきた私にとってはとても新鮮であった。絵から文へ、文から絵へという双方向の作業を行き来することによって、さまざまな可能性が開かれそうな気がする。

最終年を迎えた今年度、何らかの成果をまとめなくてはならない。完成本を出す難しさがあるので、試案本と第1班では呼んでいるが、まずは菅江真澄の絵のうちからアイヌの生活文化に関するものを取り上げて、生活絵引の試案を示すことができればと考えている。

## How to Use Pictorial Materials in Historical Studies 3

## 「人びとの暮らしと生業」に参加して

舟山 直治 (北海道開拓記念館 学芸員) FUNAYAMA Naoji

本研究会の絵引の対象地の一つとして、近世期の北海道、つまり松前地・蝦夷地を描いた絵画を選んでいただき、フィールドワークの中心を北海道にしている身にとっては、大変、光栄に思うところである。しかも、対象の絵画としてあげられている小玉貞良と菅江真澄の作品は、当時の北海道を知る上で欠くことのできない史料であると、筆者自身考えていることから嬉しさも一入である。二人の作品は、民俗学・民族学においては早くから認められているが、日本美術史では、貞良は一介の地方絵師であり、真澄も技量的には特に優れた作者と認識されているとは言い難い。このような中で、これらの作品を選定した本研究会の姿勢には、改めて敬意をはらわずにはいられないのである。

松前地・蝦夷地の絵画を扱う時には、本来ならば同僚だった林昇太郎氏の出番となった筈である。そして、氏が健在ならば、この会へ発展的な意見を提示することができたのでは、と極めて残念に思う。ここでは故人のようにはいれないが、博物館で民具を扱っている視点で、二人の絵から感じている事について触れたいと思う。

小玉貞良と菅江真澄の作品は、18世紀中頃から末頃のアイヌ文化や北辺の和人の様子を示している。その作品は、成立時期に半世紀近い時差があるものの、共に北海道絵画史の最初期にあたるといっても過言ではない。ところがこの二人、絵画を描く境遇は全く違うといえる。鑑賞用の絵画を制作する貞良、旅行記の挿絵を描く真澄、両者の表現方法は異なるのである。当然、絵を読みとるには、それぞれに違った解釈の尺度を用いる必要が生じるであろう。特に形態の表現には、流派、技術、知識の違いが生じるものかどうか判断を要するし、場合によっては相互に比較しなければならない。

また、貞良は、「松前産」あるいは「松前」と記し、松前と地縁、血縁など、何らかのかかわりがあったといえる。その一方で、真澄は松前に何の基盤もなく、さらに近隣の地域である津軽、南部においても確固たる足場があったわけではない。したがって、二人への基本的な認識として、貞良は松前を地盤にした絵師であり、反対に真澄は全くのよそ者となる。このロジックからみると、

貞良は地元の内実詳しく、反対に、真澄は滞在中の情報収集には制約があったと考えられる。真澄は松前側にとって注意を要する人物であったはずなのである。この立場の違いが、二人の松前・蝦夷の表現方法に影響を与えたということは想像に難くない。

例えば、貞良は松前と江差の町並みを近世都市の俯瞰図として屏風仕立てに少なくとも3件を描いている。六曲一双の完品は、今のところ1件で、ほかには松前と江差それぞれ半双がある。しかも、田島佳也氏が「江差浜における鯨漁と加工に勤しむ人びと『江指浜鯨漁之図』から」で取りあげた六曲一双の『江差松山屏風』を含めると、貞良が描いた俯瞰図は、松前が2件、江差が3件となる。貞良の都市図には地形を含めてさまざまな情報が溢れていることに驚くのは、筆者だけではないであろう。

真澄の都市図はというと、松前の描写が「松前福山のあらまし」の1件、江差の描写が「江差の港」、「方壺亭というあずまや」、「江差の港、奥尻の島」、「小山権現」、「江差のまちなみ」の計5件である。数の上では両者に変わりがないように感じるが、貞良の屏風と真澄の日記の挿絵では、画面の大きさが極端に違う。すなわち、受け取ることができる情報量は、真澄に比べて貞良のほうが圧倒的に多くなっているのである。

具体的には、共に南方から描いた松前について、貞良の『松前江差屏風』の「松前」(図1)と、真澄の『蝦夷廻天布利』の「松前福山のあらまし」(図2)とを見比べると質量共に差が顕著にあらわれてくる。

貞良の屏風には、右端、すなわち東にあたる白神岬から中央の城郭を経て西の弁天島まで、松前城下の地形や町並みの特徴を隈無く図示している。ところが、真澄は作品を、松前すなわち福山のあらましとしているものの、画面右側の山に祀った「七面山の堂」、中央の浜通りの「泊川」、後背部の「馬形の岡辺」、左端の山に祀った「地藏大土の堂」だけである。真澄の描いた松前は、貞良の屏風に当てはめると右側3扇にも満たない範囲だけで、城郭以西については触れられていない。江差についても同様で、沖の口や奉行所など、松前藩に関わりある施設の描き込みは少ないのである。このように貞良の屏風絵は、



図1 小玉貞良「松前」『松前江差屏風』(宮原柳暹模写) 北海道開拓記念館蔵

真澄の都市図に比べて、広い空間を示している豊富なデータ群となっている。

しかし、情報源として真澄の絵画は、貞良のそれに比べ劣っているのかということ、そうではない。菊池勇夫氏が「菅江真澄がみたコタンの景観」(「絵引」をする菅江真澄)で発表したように、真澄の描いた絵画は、貞良にはないさまざまな情報を提示してくれる。

一つは、画像として単独にあるだけでなく、各場面に付された説明文や本文中の解説があるということである。確かに真澄の作品は、絵引として、あるいは絵事典としてすでに成り立っているといえる。しかも、アイヌ語の対訳表記になっているものもある。ただし、この表記については、児島恭子氏からの指摘があったように、発音表記や対訳にかかわった通辞や真澄の解釈の質に注意をはらわなければならない。しかしながら、表記に限らず画像と語彙の関係について、補足や修正をすることによって、画像から読みとれる有形のものや習俗など無形のもの、名前や内容を繋ぐことのできる指標となりえるのではないだろうか。

二つには、注記と解説に関連するが、真澄の絵画は、描いた地域を特定できるものが多いということである。北海道においては、南西海岸を記した『蝦夷廻天布利』と津軽海峡から噴火湾沿いを記した『蝦夷廻天布利』があり、それぞれの挿絵から当時の東西蝦夷地を、真澄の視点で比較することができる。菊池勇夫氏が示したように、アイヌ民族の家屋であるチセやそれに付帯する建物などからなるコタンの景観に、東西の地域差を見いだせる。



図2 菅江真澄「松前福山のあらまし」『蝦夷廻天布利』(模本・部分) 秋田県立博物館蔵

そして、この地域差は、俯瞰した景観や建物の形態にとどまらずに、アイヌ民族や和人の生活にかかわる道具の細部にわたっても探ることが可能となる。真澄の作品は、絵引の作業をするうえで、まさに不可欠な史料なのである。

絵引をするにあたっては、現在の言葉で過去を示すことになる。しかし、中にはすでに死語となって形態から言葉が迎れぬこともあるといえる。是非、絵引作業では、細部まで詳細な貞良の都市図、画像と言葉を結ぶことのできる真澄の挿絵を相互に補完して、事物に名称を付していただきたい。また、この作業なしには、蝦夷地と松前地の地域差やその特色を示すことはできないと考える。

## 鳥瞰の視線を考える 『生活絵引』作成における歴史学、民俗学と美術史学の合流点をめぐって

池田 貴夫（北海道開拓記念館 学芸員） IKEDA Takao

筆者は、2006年12月26日に行なわれた神奈川大学COE公開研究会「人びとの暮らしと生業」に一般参加した。菊池勇夫氏による菅江真澄が描いたアイヌ・コタンの風景についての研究発表、田島佳也氏による『松前松山屏風』や土屋又三郎『農業図絵』に描かれた漁労、木材流送、農業の作業風景、都市生活風景などの諸表現の解釈に関する研究発表、およびそれらの発表に基づいた児島恭子氏、舟山直治氏、長島淳子氏によるコメント、参加者からの意見をお聞きし、大変な勉強をさせていただいた。

しかしながら、筆者なりにこの研究会を振り返ると、『生活絵引』作成にむけての大きな克服すべき課題として、歴史学的あるいは民俗学的には、近世の生活の様子を描かれた事実をもって理解するという目的がある一方で、美術史的には、描かれたものを、史実を探る材料として信用するためには大きな困難がある、との考え方の違いが浮かび上がったように思われた。

筆者自身、どちらかという美術史側からの立場にたって、アイヌ風俗図の中でも特にクマ祭り（飼育を伴うクマの霊送り）を描いた図に焦点をあてて分析し、論文を発表したことがある。筆者は、この論文において、クマ祭り図を史実とイメージのはざまに揺らぐ絵画ととらえ、現段階で史実を明らかにするための絵画として多用することは危険であり、その前に美術史的あるいは芸術論的に省察することが重要と訴え、芸術学や美術史が多民族共生の立場から芸術論を振り返り、日本辺境文化史の議論の中に参加していただくことの必要性について、問いかけたのである〔池田 2006〕

しかしながら、筆者自身もまた、民族学、考古学の目的と美術史の考え方の相違、およびその克服について踏み込まないままに議論を打ち切っていたことへの反省感を、この研究会への参加をとおして、改めて感じた。同時に、これまで美術史で議論対象となりにくかった素人絵など、芸術作品などとは呼ばれにくい絵画の存在意義はいったいどこにあるのか、という基本的な問題を再考する必要性にせまられた。

ところで、クマ祭り図のみならず、近世、近代の風俗画は、なぜ鳥瞰の視線から描かれることが多いのであろうか。絵画の技法としてはあたりまえのことかもしれないが、筆者は常々疑問を抱いてきた。鳥瞰図とは、文字どおり、鳥が空を自由に羽ばたくように、高所の目線に立って、地球上の地理や風景を俯瞰した絵画の一分類である。もともと鳥瞰図は、人間には自分の目の高さにはない高い角度からできるだけ全景を把握し絵にするという創作欲求があり、それを実現するために人間の目線からは隠れる奥のものを画面の上部に描くことによって実現されてきた絵画手法として、位置づけられているようである〔堀 2001など〕

しかしながら、筆者は鳥瞰の視線から描く理由には、さらなる理由が隠されていると考えている。例えば、菊池氏が発表した菅江真澄の描いたコタンの風景を例としてあげるならば、なぜ菅江真澄はこのアイヌのコタンのほとんどを鳥の視線から描いたのか。一つには、鳥の目線から描くことにより、コタンの全景を一枚の紙に描くことができ、コタンとしての臨場感を得られることであろう。そして、二つには、人間の目線から描いたコタンと鳥の目線から描いたコタンでは、その情報量に圧倒的な差が生じるということである。

これら普段の人間の目線よりも高い位置から描いた風俗画の多くは、自身の目線を定点において、対象を忠実に筆写した「写生」ではあるまい。「写生」であるとするならば、たまたま自身が高い位置（例えば、峠や高台など）にいたか、あるいは考えられるとすれば、木や岩に登って描いたかということになる。しかし多くは、あらゆる角度から対象となる空間を詳細に観察し、そのデータを人間の脳の中で三次元的に再構成し、一画面に描いたものであろう。その観察のためには、木にも岩にも登ったであろうし、そのような多様な目線からの観察データの複合が、このような鳥瞰図的風俗画の性格であると考えている。

例えば、沢田雪溪作『蝦夷熊祭乃図』（『風俗画報』第23号挿絵、1890年）は、鳥瞰図的絵画であり、一枚の絵

画に何コマもの場面を重ね合わせたに等しい情景描写となっている。それは、クマ祭りの一瞬の場面を写実的に切り取ったものではあるまい。クマの首を絞め、祭壇に安置する前後の数時間を、一枚の絵画に凝縮させたものなのではないだろうか。



沢田雪溪作『蝦夷熊祭乃図』（1890年、『風俗画報』第23号挿絵。復刻版：明治文献、1973年～）

『蝦夷熊祭乃図』には、アイヌの風俗の記録という側面に加え、沢田雪溪の絵師としての時間表現の努力がしのばれる。筆紙には表現しきれないほどのさまざまな出来事を、時間の経過とともにクマ祭りの現場で目撃した。雪溪が把握し記録しようとした視覚世界は、絵師としての意識作用と手の動きを通じ、多分に「時間」を有する絵画となってその命を開花させたのである。すなわち数時間、ないしそれ以上の時間の中で、その場所を舞台として起こった出来事を凝縮して説明することさえ、絵巻物ないしは鳥瞰図的に仕立てれば可能だということである。

いずれにせよ、鳥瞰の視線から描かれた風俗画は、絵画の技法論として位置づけられる一方で、作者の観察と説明努力の賜物としても位置づけることができるのである。反対に、情報量と臨場感を求めるならば、風俗画は鳥瞰図的構図を採用せざるを得なくなってくる傾向があると言ってもよい。しかしながら、写生と比べ、観察から創作に至る再構成の過程の結果、器物などの細部がより省

略化されて描かれる可能性も指摘しておく必要がある。

このように鳥瞰図的絵画を位置づけるとするならば、たとえそれが素人絵であろうと、過去の何某かの創作活動の成果品が、現代に残っていること自体の意義を認めざるをえないであろう。鳥瞰の視線から描かれた風俗画の背景には、過去の気さくな人物が、当時の生活を説明し、あるいは後世に伝えようとした努力などが秘められている。後世に生きる我々が、少なくともその努力に対して敬意を払い、それを学問の土壌に引き上げることは、先人の残したものに対する、歴史を扱う研究者の義務であろうと思う。

鳥瞰の視線をめぐり、神奈川大学COE公開研究会の内容をふまえて、以上のように考えてみた。そして筆者は、この神奈川大学の試みが、絵に描かれた事物一つ一つを学際的に議論することにより、より深く歴史や人間、情報、技術などをめぐる諸現象を総合的に思索できる機会でもあると確信した。歴史学や民俗学と美術史の一見相対し

ているかに見える当プログラムに、絵画の人間学ないし絵画の情報学ともいべき新たな研究領域への昇華を含めた議論を期待したい。

「学際的研究」という言葉が流布してから久しい。しかしながら、そのように銘を打ちながらも、その後の現場でおこった実態はどのようであったろう。そのような「学際的」な議論環境がありながらも、再び専門に閉じこもる時代に戻ってはならないと思う。まさに、研究者も鳥のような目線に立って、学問を広く見渡し、再構成を試みるものが求められているのではないだろうか。

### 参考文献

- 池田 貴夫 2006 「日本北方民族学と絵画 『クマ祭り図』の分析をとおしての問いかけ」『美学芸術学』第21号、16～37頁。  
堀 淳一 2001 「鳥瞰図を鳥瞰する」『鳥瞰図絵師の眼』住友和子編集室＋村松寿満子（編）INAX出版、12～21頁。

## アイヌ民俗図資料の見方

児島 恭子 (早稲田大学 非常勤講師) KOJIMA Kyoko

アイヌのように19世紀以前には自らの文字資料をつくらなかった人々の民俗を知るために、非文字資料はどういう意味を持つのか。文字資料がないならばとて、アイヌは絵画も描かず、アイヌに関する非文字資料は他者によるもので、アイヌ自身の与り知らぬものである。民具の実物はアイヌ自製の非文字資料であるが、狭義には、実物よりもそれらを描いた図像を非文字資料として扱おうとされているようである。個々の民具はそれ自体で完結したものであるように思われるが、使われている情景や使う人間が描かれた絵や写真などの広義の非文字資料には、民俗資料としての情報があるからであろう。それがたとえ写実ではない図像であっても、重層的に意義は見出せる。しかしその考察や研究は、対象となる人々や文化について共通の理解をもっている、もしくは持ちうる人々の間で成立する議論なのではないか。

冒頭の設問を、「非文字資料を文字資料による歴史研究を補完する資料として役立てるには」と表現したら、その営為は文字資料を主として非文字資料を従とするにすぎず、それをめざしているのではなく非文字資料自体が課題なのだとされるであろう。「非文字資料の体系化」という表現からうけるイメージは、非文字資料のみを扱うというテーマである。しかし、本誌において中村政則氏は文字資料と非文字資料の関係について4つの場合があると発言され、両者を相互補完的なものとしてとらえることによって両者がより意義を深めるとされている(『非文字資料研究』No.5、2004年9月)

じっさい、そういう絵の研究は、その絵を理解するために文字資料すなわち文献を渉猟し、民俗資料の実物を参考にして、何が描かれているのかという事実や、描く心性について検討される。絵引の作成を試みるに際して、描かれたモノの図像上の変遷や場面の分析が行われる。アイヌの人々や民俗を描いた絵についても同様である。そこから導かれるものは何なのだろうか。

2006年12月の研究会において、菅江真澄がアイヌの民俗を書き、描いた絵に「セッカ」とされた棧敷状の台があり、それを「榻」(読みはトウ)と表現している例についてとりあげた。この絵は、「広き榻(セッカ)の上に、

やゝみそぢ近からんとしの婦女(メノコ)ひとり(後略)」という文章の挿絵である。この絵引をつくるとしたら、女性が座っている床の名称をセッカというアイヌ語名称にするのかそれならどう表記するのか、榻とするのか、形状や用途を説明する一般的な語句にするのか、という問題があるが、それは世界中の図像資料に共通するので措く。問題はこの資料にしたがえばアイヌ語名称はセッカになる、ということである。しかし、それは事実としては誤りで、セッカはセツ・カ<セツ・の上>であり、セツだけが高床で、家の壁際にしつらえてあるベンチ状の寝台をさすことが多い。子熊を飼う檻や鳥の巢もセツといわれる。つまり、菅江真澄は女性が座っている高床をセツではなくセッカとしてしまったのだが、それはとりもなおさずアイヌの話した言葉を聞いたのでであろうということの意味する。日本語ではじっさいにそれを見ている状態での会話では「あの女性が座っているのは高床の上だ」とことさら「上に」とは言わないだろうが、アイヌ語ではそういう位置を表す言葉が必要なので語られたため、「上」まで高床の名称に入れてしまった。そこに異言語ゆへの誤解が生じている。このようなことに触れたが、それはたいした問題ではない。

絵引作成の対象となる非文字資料が他者によるものであるかぎり、その理解に資する文字資料、非文字資料が誰の手によったかにかかわらず、研究の営為や過程、結実するものは他者のものであることの認識を問題にしたいと思う。誤解のないように付け加えておくと、たとえばアイヌが絵引作成の研究に参加すればアイヌ民俗の研究になるというのではない。非文字資料をそれとして尊重することはどういうことかという点である。



『菅江真澄民俗図会』上巻 岩崎美術社1989、p.151

## 『農業図絵』にみる喫煙とジェンダー

長島 淳子 (早稲田大学 非常勤講師) NAGASHIMA Atsuko

喫煙は、現在もジェンダーの影響を受けやすい領域の一つである。昨今の日本では、強い健康志向から副流煙による健康被害などが問題視され、公的な場所での禁煙が広がっている。しかし、喫煙人口が減少する中で、若い女性の喫煙は増加の傾向にあるという。「男女同権」が「喫煙」という健康を害する行為で示されるのは皮肉だが、「女は煙草を吸わないものである」というジェンダーバイアスを打ち破ろうとする、女たちの意識的な(あるいは無意識の)「抵抗」という意味合いとしては、理解できる。海外でもジェンダー領域である端的な例として、最近韓国の女子留学生から聞いた話を紹介しよう。韓国では女性の公衆の面前での喫煙はタブーであり、女子学生は煙草を吸いたい時には女子トイレに行くそうである。隣国のリアルタイムの状況に驚かされるが(実は、30年前に筆者が韓国人留学生から聞いた話とまったく変わっていない)、彼女は儒教の影響が根強いのではないかと話していた。

さて、煙草の日本への流入は戦国期から江戸初期頃、ポルトガル人によってもたらされたとされる。すでに享保期(18世紀初頭)には全国的に普及したが、度重なる幕府の本田畑への作付け禁止や喫煙の習慣・売買などの禁令にも拘わらず、人々の嗜好品として階層を超えて定着した煙草は、その夥しい需要を満たすための商品生産量を拡大させていった。

1717(享保2)年、加賀の十村土屋又三郎によって著された『農業図絵』(以下、『日本農書全集26』農山漁村文化協会、1983を参照)には、金沢近郊農村の一年を通じた農民生活の諸相が生き生きと描写されている。成立年は煙草が普及・定着した時期と重なる。その事実を示すかのように、『図絵』にも煙草の播種(同書 p.47)や



葉を収穫する様子(同書 p.142)が描かれている。

『図絵』には人物の描かれたものが177枚(見開きを2枚とする)があるが、そのうちの15枚に煙管で煙草を燻らす人物の姿を確認することができる。男女別では、14枚が男性の喫煙者で、合わせて18人、残りの一枚に女性一人がみられるが、白髪の「老婆」である(同書 p.58)この「老婆」は、満開の桜の下で花見の宴を催す老若男女の団にいるが、足を伸ばしてくつろぐ傍らの若い男に話しかけでもするように、煙管を片手に煙を吐き出している。この一例を除けば、絵図全体ではその数の多さから、喫煙者はいずれも男性という印象になる。

中村文氏によると、江戸時代の女性の喫煙の特徴は、単独、ないしは女性複数間で行われる。複数の場合、上下関係があるときは目上の女性が喫煙し、対等であればその制約はない。基本的に男性の前では吸わないが、男性が目下であればその限りではないとされる(中村「江戸時代の喫煙の諸相」、『女性の喫煙と社会規範』(財)たばこ総合研究センター他、1995)。したがって女性でも高齢になれば、いずれの制約からも外されることになる。いっぽう、喜多村信節の『嬉遊笑覧』巻10上(1830・文政13)に、「昔はたばこのむ女稀なりしとぞ、「娘容儀草子」に昔は女のたばこ呑むこと、遊女の外は怪我にもなかりしことなるに、今たばこのまぬ女と、精進する出家は稀なりと云り」とあるように、19世紀前半では女性の喫煙は一般的となるが、それ以前では、遊女などを除いて希有なことに類したようである。

こうした事柄を考え合わせると、18世紀初頭の農村生活(遊所ではない)を描いた『農業図絵』に、女性の喫煙場面が描かれていない事情が頷けるのである。また、女性が公衆の面前で喫煙できず、私的空間でのみ許されたのだとしたら、十村のような男性農政吏僚の目の届かない場所での喫煙はありえたと推測するほうが妥当であろう。そして、高齢者であれば、女性であっても何らの制約を受けずに、「花見の宴」で煙草を楽しむことができたことも、この絵図は雄弁に語ってくれるのである。現代に繋がるジェンダーを考えるうえで、示唆に富んだ情報を提供してくれる絵画資料である。

煙管で煙草を吸う「老婆」(『農業図絵』p.58、部分)

# 幻の「満洲国」建国神廟を復原する

Restoration of a Manchurian Shrine



津田 良樹 (神奈川大学工学部建築学科 助手 / 共同研究員) TSUDA Yoshiki

旧満洲国建国神廟は1940年に造営され、1945年に焼失した。わずか5年余の間、存在しただけの神廟である。その神廟は、ラストエンペラー満洲国皇帝溥儀が天照大神を祀るために帝宮内に建てた、日本における伊勢神宮あるいは宮中賢所に相当する満洲国宗廟である。

建国神廟の創建に至る経過、祭神問題、鎮座祭の様子、満洲国崩壊にともなって流転する御神鏡などについては嵯峨井建、島川雅史、外島瀏、八束清貴などの論稿から<sup>(1)</sup>ある程度詳細を知ることができる。ところが、建国神廟の建物については、その実態が必ずしも明らかでない。そこで、本稿では建国神廟の建築がいかなるものであったかについて、残された資料を基に検討してみたい。

## 1 文献資料からみた建国神廟

『満洲建国十年史』<sup>(2)</sup>によると「神廟の御本殿は南面し、祭詞殿、神饌所、祭器所及び拝殿等がこれに附属してゐる。周囲は板塀を以て廻らされ、其の正面には白木神明造の鳥居が建設せられる豫定である。御建物は固より仮の御建築であつて、其の様式は白木、銅葺の権現造であり、用材はすべて満洲産の紅松が用ひられてゐる。」とある。

また、『建設年鑑 康徳十年版』<sup>(3)</sup>には「建国神廟御造営準備は康徳7年2月総務庁企画処が中心となって事をすすめ、御造営は建築局之を奉仕し、2月9日帝宮内の浮域に地鎮祭を挙行、桧素木銅版葺流造本殿<sup>(4)</sup>、祝祠殿、祭器庫、神饌所、拝殿の御造営に着手、3月30日御本殿立柱式を行い、5月28日竣工、7月15日皇帝陛下御臨の下に厳肅莊嚴に鎮座祭の御儀が行なわれて、まことに曠古の御盛儀であつた。」とある。

これら当時の資料や証言などをもとに戦後纏められた『満洲国史』<sup>(5)</sup>によると、神廟は建築局の施工で、1940年2月9日地鎮祭、3月20日に立柱式、5月28日に竣工、7月15日鎮座祭を執り行ったとされ、「社殿は銅板葺木造、南向き権現造りである。殿内は内陣、祭祀殿、拝殿と続き、内陣以外は石敷で、すべて立札式が採用された。社殿外

には神門があり、後には皇帝の命で神門外に木造の大鳥居が建てられた。社殿は日本の角南隆の設計に係る<sup>(6)</sup>。」とあり、これが通説とされている。

いずれにせよ、これらの資料を総合しても、社殿の様相は、塗装をしない素木の檜や紅松の本殿・幣殿(祝祠殿、祭器庫、神饌所)・拝殿からなる権現造で、銅版葺であり、内部は本殿を石敷の土足であったことが分かる程度であった。

## 2 ビジュアルに復原された建国神廟

昨夏、海外神社跡地調査の一環として、旧満洲国の「満鉄附属地神社」跡地調査<sup>(7)</sup>を行なった際に、旧仮帝宮(現、偽滿皇宮博物院)庭園内に残存する建国神廟の礎石を略実測した。そのデータや『神社建築』<sup>(8)</sup>所収の「建国神廟平面機構」(略平面・略立面、但し寸法等は不明)<sup>(9)</sup>および2002年にNHKで放映された「ラストエンペラー最後の日」<sup>(10)</sup>に紹介された建国神廟の古写真。そのほか神門外から拝殿に向かって撮られた写真などを総動員して、建国神廟の実態にビジュアルに迫りたい。

略実測を行なった礎石は、かつて土に埋もれ、雑草が生い茂った状態であったが、2001年に発掘・整備されたものである。とはいえ、2006年8月現在、再び建物位置には灌木が繁茂し、礎石の全貌をみることが難しい状況になっている。昨夏に行なった略実測図が図2である。『神社建築』所収の略平面(略実測した礎石図と比べてみると、略平面は必ずしも正確ではないようだ)や高さ関係を略立面から想定して、古写真を参考にしつつ各部を復原すると以下のようなろう。

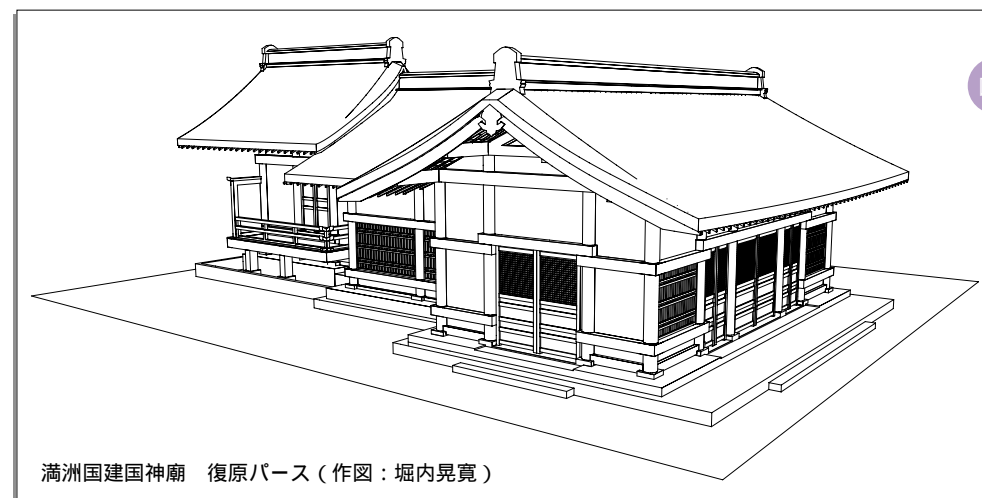
本殿は切妻造の妻入で、銅板葺の軒先を少し反らせている。正面間口10尺を柱間三間に分割し、中央間を5尺と広く取り観音開きの扉を建て込み、両脇間を2.5尺として板壁としていたようだ。背面は5尺二間の板壁であろう。両側面は6尺二間であり、前方の柱間は観音開きの扉が入っているようで、後方の柱間は板壁である。本殿は高床のようで、背面を除く三方に縁を廻らし、両背面脇に脇

障子を立てる。正面には木階もあったようだ。一方、拝殿は切妻造平入で、屋根は銅板葺の軒先を少し反らせる。正面間口を柱間五間に分割し、中央の三間に観音開きの扉を建て込み、両脇間は格子窓であった。両側面は柱間を三間に分割し、中央間に観音開きの扉、両脇間を板壁とする。

本殿・拝殿を結ぶ幣殿部分は両下造で、銅板葺。本殿に向かい幣殿右奥を祭器庫、左奥を神饌所にあて、残る部分を祝詞舎にしていたようだ。神饌所などがある側面には千本格子の窓が付けられている。また、拝殿および幣殿部分は土間で石を四半敷にしていたようである。

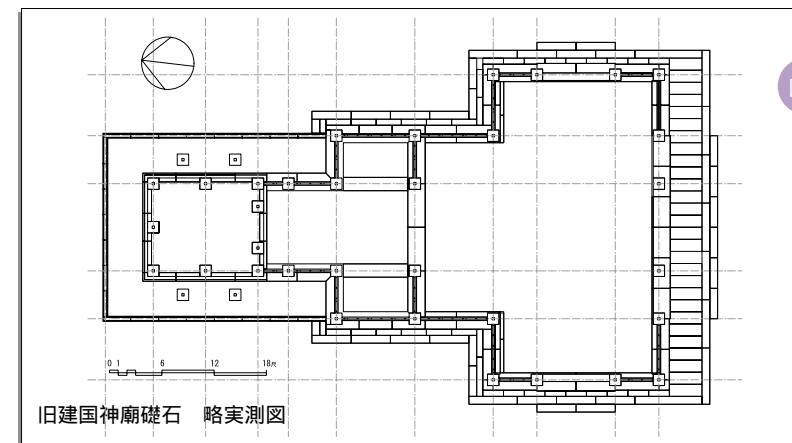
以上のように神廟を立体的に復原したものが図1である。本殿は、天照大神を祀っているにも関わらず、神明造ではない。日本国内では余り例を見ない切妻造妻入の本殿である。その本殿と切妻造平入拝殿とを両下造幣殿で繋いだ複合社殿で、主に檜材によって建てられている。古写真や復原図などをみる限り、中国的な意匠はほとんど見当たらない。寒冷地である満洲の地を考慮して、幣・拝殿を土足にした点を除けば、極めて日本的な建築様式で建てられていたといえよう。

当時溥儀は、天皇と同様な権威を得たいがため、自らの拠り所であった清朝の祖神を祀ることさえ放棄し、天皇家の祖神である天照大神を建国の神として祀り、日本の神道を国教とするなど、過剰なまでに天皇と同化しようとしていた。その溥儀が創建した神廟であれば、中国的な要素を混じえず、極めて日本的な建築様式で建てられたことは当然の帰結といえようか。



満洲国建国神廟 復原パース (作図: 堀内晃寛)

図1



旧建国神廟礎石 略実測図

図2

- (1) 嵯峨井建「建国神廟と建国忠靈廟の創建」『神道宗教』156号、1994年9月。島川雅史「現人神と八紘一宇の思想 満洲国建国神廟」『史苑』43巻2号、1984年3月。『満洲帝国皇帝陛下御訪日と建国神廟御創建』日満中央協会、昭和16年1月。外島瀏『終戦秘話 満洲国祭祀府の最後 外山祭務処長手記』、昭和42年1月。八束清貴「満洲建国神廟仕末記」神社新報、昭和42年6月3日。など。
- (2) 満洲帝国政府、『満洲建国十年史』、原書房、昭和44年3月。
- (3) 『建設年鑑、康徳十年版』(満洲帝国協和会、1943年)所収の建築局第一工務處長、桑原英治「政府の營繕事業に就て」。
- (4) 『建設年鑑、康徳十年版』では、本殿を流造とするが、後述するようにこれは誤り、本殿は切妻造妻入である。
- (5) 満洲国史編纂刊行会、『満洲国史』総論、滿蒙同胞援護会、昭和45年6月。旧満洲国関係者を中心に資料と証言をもとに編纂された。
- (6) 『満洲国史』には、内務省神社局營繕課長であった角南隆の設計とある。しかし、前掲嵯峨井註1論文によると、実際には角南の命により谷重雄が全責任者となり、図面を引いたのは荻須左兵衛であったようだ。
- (7) 津田・中島三千男他「旧満洲国の『満鉄附属地神社』跡地調査からみた神社の様相」(『年報 人類文化研究のための非文字文化資料の体系化』第4号、2007年3月)。
- (8) 山内泰明『神社建築』神社新報社、昭和42年8月30日。序によると、山内氏はかつて内務省神社局にあって全国の多数の神社の造営や修理に携わり、戦後神宮司庁に移り營繕部長を務めた神社建築の権威。
- (9) 略平面をもとに、嵯峨井が前掲註1論文で平面を掲載しているが、内容は略平面とほとんど変わらない。
- (10) NHK、2002年1月8日放映「その時歴史が動いた『ラストエンペラー最後の日〜満洲国』と皇帝・溥儀〜」で紹介された写真。出典は未確認。



## 「虹」と「市」

小野地 健 (COE研究員・PD) ONOCHI Takeru

虹の現れたところには市をたてて売買をしなければならぬ、という慣習をご存知だろうか。この慣習を知ったときには驚いた。そして奇妙に思った。空を彩る鮮烈で神秘的な虹と、地上の人間の物欲が渦巻く乱雑な市の売買のイメージに大きな齟齬を感じたからだ。しかし、この実に不思議な慣習は日本古代、中世に実在した。

例えば、『日本紀略』長元三年(1030)七月六日「關白并春宮大夫家虹立。依世俗之説。有賣買事。」、『百鍊抄』寛治六年(1092)六月二十五日「高陽院立市。依虹蜺立也。先令諸道勘申。」保延元年(1135)六月八日「中宮廳前立市。依虹見也。」という具合だ。

なぜ虹という自然現象が現れると、人々は市をたて売買という行為を行ったのだろうか。しかも、国家的な法の命令ではなく、「世俗之説」によって行われるから、人々を無意識のうちに包み込んでいるような大きな規範、あるいはコスモロジーというべき次元へと思い切って踏み込んでみなければ、その慣習の理解はできない。

民俗学や歴史学の研究者たちは、そこへ踏み込み、魅力的な解釈を提示してきた。民俗学者の安間清は、虹は古代から竜蛇、水神として信仰され、財宝をもたらすものであるという観念があり、それがこの慣習の背後にあると推測した。中世史学者の勝俣鎮夫は、中世の人々は天の橋である虹を渡り天神精霊が降臨示現すると考え、虹を渡ってきた神を迎える行事が、市を立て売買を行うことだったと推測した。いずれも宗教現象や経済現象が混然となった事象として、虹と市を捉えている。

以上を踏まえ、文化人類学や記号論の視点から、虹と市の持つ論理を思い切って整理してみよう。まず、虹の普遍的といってよい大きな特徴は、多色であると観念されることだ。虹はその姿の中に複数の色というカテゴリーを包み込んでいる現象であり、そこには、多様なカテゴリーが一つの現象の中で接近し並存しているという「関係の過剰性」の論理が読み取れる。それは、虹が天の橋や道とされたり、近親相姦や両性具有を象徴することからも裏付けられる。それらは、本来は分離しているべきである天と地、近親の異性、男と女というカテゴリーが過剰に結びつくという論理を共有する。

一方、市の場を支配する市場交換の論理とは「関係を(その場で)清算する」ことだ。贈与と交換が相手にその場で返せない贈り物を与えることで、負い目を持続させ関係を深めるのと対照的に、市場交換は相手から得たモノに対して、

即座に対価が支払われて清算され、負い目が持続することはない。相手と交換関係を結びながら、その場で関係を断ち切ってしまうのが市という場なのである。実際に古代、中世の市では歌垣が行われて男女が自由に交歓し盗品が売買されるなど、市場外での世俗的な諸関係をいったん断ち切ったうえで交換が行われる特殊な場であったことは、勝俣鎮夫が指摘している。

以上で整理した「関係の過剰性」としての虹と「関係を清算する」場としての市という論理を踏まえれば、なぜ虹が現れると市をたてるのか、一つの仮説を提示できる。

虹は「関係の過剰性」の出現であり、人間が作り上げた分類秩序である世界を混乱させ、亀裂を走らせる。特に分類秩序の極点である都の真ただ中に忽然と出現する虹は、なおさら脅威である。これに対して、人々は「関係を清算する」べく市をたてたのだ。つまり、虹が立ったところに市をたてる、という慣習は、虹によってもたらされた分類秩序の混乱に対して、人間の側からは、それとは正反対の論理である関係を清算し断ち切る市場交換の場としての市を作り出すことで、混乱を調停し秩序の回復をはかろうとしたのだ。

別の言い方をすれば、虹という自然現象がもたらした関係の過剰性(過剰な接近)を、人間側が関係を清算する(過剰な分離)行為によって媒介し、自然と人間との「適切な距離」を設定するということなのである。そこには、異常な自然現象をただ排除するのではなく、それと適切な関係を築こうとする人間と自然の交感のあり方が窺える。

人間は自らの生きる自然環境をも文化秩序へと組織し、改めて位置づけ、その一部とする。それによって、単なる生存条件として以上に、意味に満たされた緊密な関係として両者は結びつく。虹の立ったところに市をたてる慣習とは、人間の行為と自然とが、文化秩序の中に包み込まれ、ひとつの世界として緊密に結び合わされて響きあう、全体的社会事象として捉えられていたことを示しているのではないだろうか。

- 参考文献  
 小野地健 2007「虹と市 境界と交換のシンボリズム」『人文研究』160: 29-76。  
 勝俣鎮夫 1986「売買・質入れと所有観念」朝尾直弘ほか編『日本の社会史 第4巻』181-209、岩波書店。  
 安間 清 1978『虹の話』おりじん書房。

## キリスト教と現代日本人の生活

曹 榮 (北京師範大学文学院民俗学与文化人類学研究所 博士生) CAO Rong

2006年9月2日から15日まで、私は神奈川県立21世紀COEプログラムの訪問研究員として、日本で二週間の訪問研究を行なった。今回の訪問研究のキーワードはキリスト教と日本文化の交流あるいは触れ合いである。佐野賢治教授の指導のもと、劉湯水氏、永田衣紗氏の協力を得て、山手教会・横浜外国人墓地・フェリス女学院大学・澤田美喜記念館・上智大学・横浜中華街などを相次いで訪問した。訪問、参観、関連資料の調査を通じて、日本へのキリスト教伝播の歴史と現状、及びキリスト教と日本文化との出会いと交流に対してある程度の理解を得られた。本文では主に調査資料に基づいて、キリスト教と日本人の生活について、簡単に述べてみたい。

現在、キリスト教は神道、仏教と共に、日本の三大伝統宗教の一つである。訪問中、私はよくこのような言い方を耳にした。「日本人は、生まれた時は神道信者で、結婚する時はキリスト教徒、死ぬときは仏教徒である。」この言い方は日本人の宗教に対する態度の一種の反映のみならず、キリスト教が日本人に与えた影響の一側面を表している。キリスト教文化の一部が既に多くの日本人の日常生活の中に入り込んでいる。キリスト教の多数の祝日が、多くの一般的な日本人に知られている。例えば、クリスマス、イースター、聖母の被昇天日等。日本の多くの家庭では、キリスト教徒がいなくてもクリスマスを祝い、教会で結婚式を挙げる若者も多い。しかし、キリスト教が普通の日本人に与えた影響は神道・仏教ほど直接的ではない。キリスト教文化の多くは日常生活にさほど深く入りこんではおらず、神道と仏教こそが伝統的な風習となっている。

日本のキリスト教徒の数は多くないが、日本社会に与える影響は大きい。フェリス女学院大学のある教授によれば、日本のキリスト教の発展はゆるやかなものだが、多くの信者は良好な教育を受けた上層社会の人々である。よって、その人々が社会に与える影響は計り知れない。

キリスト教徒は一般に、日常生活の中でもキリスト教の儀式に従うことで人生儀礼と宗教的な生活を全うする。冠婚葬祭の面でも非キリスト教徒とは異なる特徴が見受けられる。特に葬儀の場合、一般に日本人は皆喪服を着るが、キリスト教式の場合、喪服を着る習慣はなく、多くは亡くなった日から一ヶ月後の「昇天記念日」に納骨または埋葬する。日本の

教会には墓地を持っているところが少ないため、多くの信徒が一般的に非キリスト教徒と一緒に埋葬される。伝統的には男性が亡くなったら、家族の人と一緒に埋葬される。だが、もし男性信徒が信徒ではない家族と一緒に埋葬されることを望まないときは、家族にその旨を伝えることで、宗教上の断絶が発生する。妻は夫の許可を得てから墓を移すことができる。従って、キリスト教信者たちは往々にして、キリスト教と日本伝統文化の間で選択と調和を図ることを余儀なくされている。

キリスト教は日本の教育面に大きな影響を及ぼしている。特に、下層社会と女子中学教育において著しい。今日に至るまで、多くの私立中学、女子大学、私立大学がキリスト教徒によって創設された。横浜だけでもフェリス女学院大学、横浜共立学園、成美学園(現・横浜英和女学院高等学校)などのキリスト教系学校がある。しかしキリスト教系学校とはいっても、学校の中のキリスト教教育的な色彩は決して濃くない。フェリス女学院大学のある教授によると、キリスト教系学校でありながら、教授の宗教の授業は四コマのみである。一クラス約四十人のうち、キリスト教徒は多くても十数人しかいない。牧師になる人の数も少ない。学生がキリスト教系学校を選ぶ理由のひとつには、その安い学費もあげられよう。

キリスト教は、神道、仏教と並ぶ日本の三大宗教の一つでありながら、普通の日本人にとっては依然として少数派で、西方文化のひとつの記号に過ぎない。日本のキリスト教徒は、キリスト教徒としての自分と日本の伝統文化との関係を、現実社会の中で調和させなければならないのだ。

カトリック山手教会

横浜外国人墓地



\*本稿は中国語で提出されたものを劉湯水(RA)が翻訳し、また紙面の都合から編集部で手を加えたものである。



# 2007年度研究担当者紹介(事業推進担当者・COE教員・共同研究員)

2007年4月現在

氏名	所属部局・職名	専門分野
<b>事業推進担当者</b>		
福田 アジオ	FUKUTA Ajo	歴史民俗資料学研究所 教授
大里 浩秋	OSATO Hiroaki	外国語学研究所中国言語文化専攻 教授
香月 洋一郎	KATSUKI Yoichiro	日本常民文化研究所 教授
北原 糸子	KITAHARA Itoko	歴史民俗資料学研究所 教授
橋川 俊忠	KITSUKAWA Toshitada	歴史民俗資料学研究所 教授
河野 通明	KONO Michiaki	日本常民文化研究所 教授
齊藤 隆弘	SAITO Takahiro	工学研究科電気電子情報工学専攻 教授
佐野 賢治	SANO Kenji	歴史民俗資料学研究所 教授
鈴木 陽一	SUZUKI Yoichi	外国語学研究所中国言語文化専攻 教授
孫 安石	SON An Suk	外国語学研究所中国言語文化専攻 准教授
田上 繁	TAGAMI Shigeru	歴史民俗資料学研究所 教授
田島 佳也	TAJIMA Yoshiya	日本常民文化研究所 教授
西 和夫	NISHI Kazuo	日本常民文化研究所 教授
廣田 律子	HIROTA Ritsuko	歴史民俗資料学研究所 教授
ジョン・ボチャラリ	John BOCCELLARI	東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻 教授 歴史民俗資料学研究所 非常勤講師
前田 禎彦	MAEDA Yoshihiko	歴史民俗資料学研究所 准教授
的場 昭弘	MATOBA Akihiro	歴史民俗資料学研究所 教授
山口 建治	YAMAGUCHI Kenji	外国語学研究所中国言語文化専攻 教授
<b>COE教員</b>		
青木 俊也	AOKI Toshiya	松戸市立博物館 学芸員 COE教員(非常勤講師)
金 貞我	KIM Jeong Ah	COE教員(非常勤講師)
中村 ひろ子	NAKAMURA Hiroko	COE教員(特任教授)
浜田 弘明	HAMADA Hiroaki	桜美林大学リベラルアーツ学群 教授 COE教員(非常勤講師)
<b>共同研究員</b>		
榎 美香	ENOKI Mika	千葉県立中央博物館 上席研究員
夏 宇 継	XIA Yuji	歴史民俗資料学研究所 非常勤講師
金子 隆一	KANEKO Ryuichi	東京都写真美術館学芸員 専門調査員
刈田 均	KARITA Hitoshi	横浜市歴史博物館 学芸員
川田 順造	KAWADA Junzo	日本常民文化研究所 客員研究員
菊池 勇夫	KIKUCHI Isao	宮城学院女子大学学芸学部 教授
木下 宏揚	KINOSHITA Hirotsugu	工学研究科電気電子情報工学専攻 教授
君 康道	KIMI Yasumichi	東京大学大学院総合文化研究科 講師
佐々木 長生	SASAKI Takeo	福島県立博物館 専門学芸員
佐々木 睦	SASAKI Makoto	首都大学東京オープンユニバーシティ 准教授
鄭 美愛	JUNG Mee Ae	筑波大学大学院生命環境科学研究科 外国人受託研究員
津田 良樹	TSUDA Yoshiki	工学部建築学科 助手
富井 正憲	TOMII Masanori	工学部建築学科 助教
長瀬 一男	NAGASE Kazuo	株式会社わらび座 チーフディレクター
中村 政則	NAKAMURA Masanori	元歴史民俗資料学研究所 教授
能登 正人	NOTO Masato	工学研究科電気電子情報工学専攻 准教授
八久保 厚志	HACHIKUBO Koshi	人間科学部 准教授
平井 誠	HIRAI Makoto	人間科学部 准教授
三鬼 清一郎	MIKI Seiichiro	元歴史民俗資料学研究所 教授

## 主な研究活動

(2007年4月～5月実施分)

### 研究推進会議

- 第1回 4月13日・2007年度COE研究員(RA)の選考、2007年度研究担当者の研究班等の所属について 他
- 第2回 4月18日・2006年度研究拠点形成費の実績報告書、海外提携校派遣・招聘若手研究者募集要項(案)について 他
- 第3回 5月23日・海外提携校派遣研究員選考、PD・RAの研究業務分担について 他

### 全体会議

- 第1回 4月20日・2007年度事業組織・研究実施計画および予算、海外提携校派遣・招聘若手研究者募集要項について 他

### 研究会

#### 全 体

- 第4回 4月20日・各班・課題からの昨年度研究成果報告

班(課題) \* 課題名の表記は略称です

- 4月6日・3班 打合せ
- 4月7日・1班『東アジア生活絵引』編纂 研究会
- 4月9日・1班「マルチ言語版『絵引』編纂」研究会
- 4月11日・5班「実験展示」研究会
- 4月17日・1班『東アジア生活絵引』編纂 研究会
- 4月18日・3班 会議
- 4月20日・2班 会議
- 4月24日・4班「地域統合情報発信」会議
- 5月11日・1班『東アジア生活絵引』編纂 研究会
- 5月16日・5班「実験展示」研究会
- 5月23日・2班 会議
- 5月31日・4班「地域統合情報発信」研究会および班会議  
小野 博(コンテンツ株式会社)「只見町インターネット・エコミュージアムのコンテンツ構想」  
佐野 賢治(F・ルシーニュ、小松 大介)「地域情報のコンテンツ化」



### 現地調査

福田 アジオ、菊池 勇夫、金 貞我、中村 ひろ子、前田 禎彦	千葉県佐倉市(4月28日)
『近世・近代生活絵引』編纂のため、国立歴史民俗博物館企画展示「西のみやこ・東のみやこ」の見学、調査	
佐野 賢治、小野地 健(PD)	福島県南会津郡(4月29日～30日)
只見町教育委員会において地域統合情報発信のコンテンツとしての民具カードの入力作業方法の開発	



## 受贈資料一覧（書籍・雑誌）

（2007年2月～3月）

タイトル	発行所
国立歴史民俗博物館編『西のみやこ 東のみやこ 描かれた中・近世都市』	国立歴史民俗博物館
原信田 実著『謎解き 広重「江戸百」』	集英社
『愛知学院大学文学部紀要』No.36	愛知学院大学文学部
第2回「資源循環科学・工学」国際会議 要旨集	大阪府立大学21世紀COEプログラム 「水を反応場に用いる有機資源循環科学・工学」
『先端社会研究』No.6	関西学院大学社会学研究科21世紀COEプログラム 「人類の幸福に資する社会調査」の研究
『見る、撮る、魅せるアジア・アフリカ！ 映像人類学の新天地』	京都大学21世紀COEプログラム 「世界と先導する総合的地域研究拠点の形成」
平成17年度年次報告書 No.3	京都大学大学院法学研究科「21世紀型法秩序形成プログラム」
ニューズレター No.7、8	九州産業大学21世紀COEプログラム 「柿右衛門様式陶芸研究センタープログラム」
ニューズレター No.10	慶應義塾大学21世紀COEプログラム 「多文化多世代交差世界の政治社会秩序形成 多文化世界における市民意識の動態」
CIRMニューズレター No.17 平成18年度成果報告書、平成18年度若手研究成果報告書	慶應義塾大学21世紀COEプログラム 「心の解明に向けての統合的方法論構築」
ニューズレター No.6	静岡大学21世紀COEプログラム 「ナノビジョンサイエンスの拠点創成」
日本文学研究 No.38	帝塚山学院大学日本文学会
『複雑系生命システム研究センター』（2005年度実績報告書） 21世紀COEプログラム融合科学創成ステーション （2002～2005年度報告書）	東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻21世紀COEプログラム 「融合科学創成ステーション」
『DALSニューズレター』No.17	東京大学大学院人文社会系研究科21世紀COEプログラム 「生命の文化・価値をめぐる『死生学』の構築」
研究叢書『Katalog Sejarah Lisan Jepang di Sulawesi Selatan』 研究叢書『Katalog Naskah Ali Hasjmy Aceh』 『史資料ハブ 地域文化研究』No.9	東京外国語大学21世紀COEプログラム 「史資料ハブ地域文化研究拠点」
言語情報学研究報告 No.12～15 言語情報学 No.6『言語情報学と話ことばコーパス 言語学・応用言語学・ 情報工学の寄与』	東京外国語大学21世紀COEプログラム 「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」
ニューズレター No.14、18	東京工業大学21世紀COEプログラム 「インスティテューショナル技術経営学」(SIMOT)
平成18年度 最終成果報告書	東京工業大学大学院理工学研究科21世紀COEプログラム 「フォトニクスナノデバイス集積工学」
Wind Effects Bulletin No.7 ニューズレター『Wind Effects News』No.14	東京工芸大学21世紀COEプログラム風工学研究センター 「都市・建築物へのウィンド・イフェクト」
『The 2nd Tohoku-NUS Joint Symposium on the Future Nano-medicine and Bioengineering in the East Asian Region』 『The 9th International Symposium on Future Medical Engineering Based on Bio-nanotechnology』	東北大学21世紀COEプログラム 「バイオテクノロジー基盤未来医工学」
ニューズレター No.9	奈良女子大学21世紀COEプログラム 「古代日本形成の特質解明の研究教育拠点」
ニューズレター No.12	一橋大学21世紀COEプログラム 「現代経済システムの模範的評価と社会的選択」
ニューズレター No.5 21世紀COE国際日本学研究叢書4『いくつもの琉球・沖縄像』	法政大学国際日本学研究センター
『科学技術動向』No.71	文部科学省科学技術政策研究所 科学技術動向研究センター
21世紀COEプログラムの概要 2007～08	文部科学省独立行政法人日本学術振興会
ニューズレター No.6 『演劇研究センター紀要』No.8、9	早稲田大学21世紀COEプログラム 「演劇の総合的研究と演劇学の確立」

## 研究担当者紹介

2007年度より、新たに1名の共同研究員が加わりました。



共同研究員

氏名：鄭 美愛 JUNG Mee Ae  
 所属・職名：筑波大学大学院生命環境科学研究科  
 外国人受託研究員  
 専門：人文地理学  
 所属課題班：景観の時系列的研究

## 2006年度退任の研究担当者

本学COEプログラムの研究に長い間ご協力いただき、  
ありがとうございました

2007年3月31日付

事業推進担当者	中島 三千男 NAKAJIMA Michio
事業推進担当者	小馬 徹 KOMMA Toru
共同研究員	河野 眞知郎 KAWANO Shinjiro

## COE 調査研究協力者

本プログラムの調査研究活動を支援していただく、COE調査研究協力者に今年度委嘱された方々です。 2007年5月現在

氏名	所属部局・職名	所属課題班
堀内 寛晃 HORIUCHI Hiroaki	神奈川大学大学院工学研究科博士前期課程修了	人間活動と災害の痕跡解読
山本 志乃 YAMAMOTO Shino	旅の文化研究所 研究員	『近世・近代生活絵引』編纂
富澤 達三 TOMIZAWA Tatsuzo	葛飾区郷土と天文の博物館 専門研究員（非常勤）	マルチ言語版『絵引』編纂
中野 泰 NAKANO Yasushi	筑波大学大学院人文社会科学部 専任講師	『東アジア生活絵引』編纂
鈴木 彰 SUZUKI Akira	神奈川大学外国語学部 准教授	マルチ言語版『絵引』編纂
韓 東洙 HAN Dongsoo	漢陽大学校建築学 教授	『東アジア生活絵引』編纂
尹 賢鎮 YOON Hyun-jin	延世大学校中央博物館 学芸員	『東アジア生活絵引』編纂
岡本 浩一 OKAMOTO Koichi	株式会社わらび座 研究員	身体技法の比較研究
李 善愛 LEE Sun Ae	宮崎公立大学人文学部国際文化学科 准教授	景観の時系列的研究
田口 洋美 TAGUCHI Hiromi	東北芸術工科大学芸術学部 教授	環境認識とその変遷

## COE 研究員

今年度COE研究員（PD・RA）に採用された方々です。

2007年5月現在

	氏名	専門	所属課題班
PD	王 京 WANG Jing	民俗学、日中関係史	『東アジア生活絵引』編纂
	小野地 健 ONOCHI Takeru	歴史民俗資料学、文化人類学	地域統合情報発信
	國弘 暁子 KUNIHIRO Akiko	文化人類学	身体技法の比較研究
RA	氏名	専門	所属課題班
	佐々木 弘美 SASAKI Hiromi	絵画資料研究	『近世・近代生活絵引』編纂
	土田 拓 TSUCHIDA Taku	民俗学	景観の時系列的研究
	彭 偉文 PENG Weiwen	民俗学	『東アジア生活絵引』編纂
	劉 馮氷 LIU Kebing	中国言語文化	人間活動と災害の痕跡解読

## 2007年度 海外提携研究機関の派遣研究員

本プログラムより派遣される若手研究者は、約2週間をそれぞれの研究課題にそって現地調査を実施します。

### 派遣研究員

氏名	坂井 美香 SAKAI Mika
派遣先	華東師範大学中国民俗保護開発研究センター
期間	2007年8月13日～8月26日
研究課題	電気映像を用いない情報伝達の方法と効用について
氏名	國弘 暁子 KUNIHIRO Akiko
派遣先	プリティッシュコロロンビア大学 アジア学科
期間	2007年10月1日～10月15日
研究課題	インド、グジャラート州からカナダへの人の移動と、 移住者の生活空間に関する調査研究
氏名	王 京 WANG Jing
派遣先	中山大学中国非物質文化遺産研究センター
期間	2007年11月5日～11月18日
研究課題	戦前広州における民俗学運動

## 編集後記

今回の特集は、昨年12月におこなわれた公開研究会「人びとの暮らしと生業」の総括と、それをふまえた展望になります。その発表者とコメントーターの方々を中心に執筆をお願いいたしました。ご執筆の方々に御礼申し上げます。ゴールデンウィーク前、「え、2～3ページ？書けるかなあ」と言われていた田島佳也先生ですが、連休明けにはなんと13ページにおよぶ論考を持参されました。その意欲と問題提起はそのまま受けとめねばと思い、特集にしてもかなりページの比重が高い誌面構成になっています。この雑誌は毎号どこかで試行錯誤なことをやらざるを得ませんので、思い切ってそれにページをあててみた次第です。次号はひょっとするとインタビュー三連発という、今回はまったく趣の違った号になるかもしれません。（香月）

表紙写真の撮影のため突然訪問したにもかかわらず、機械工学センターの関係者の方々には大変お世話になりました。この場をお借りして御礼申し上げます。（関）